836
209
3

茅草年録

堤蟻叢書

六十三

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

隄蟻叢書　六三

国立国会図書館　　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

癸亥叢書第四輯目録　七月至十一月

○薩州藩士書柬　妄偽

於横濱一千八百六十三年（文久三年七月八日）第八月十一日新聞紙

七月十一日太好庵宇八同止ス話

薩州敎ヲ説二條　（七月九日着）

京師私商　在京玉一氏同寮ヘ書送ル所薩州戦争ノ（我七月八日）

七月四日薩船四艘（七月七日）

同止松作中立

横濱出役ノ士伏薩州戦争風聞

英仏兩國薩州ヘ戦争ス

薩州別條

薩船英國戦争實見之話　（七月十四日）

英國ヘ（我七月八日）第六十三年第八月十一日横濱増新

英私水先案内ノ士二人ノ口吹

唐古島英船合戦実録　富吉丸ヘ物聞書

八月十五日自横濱来書

横濱在州某氏家塾ヘ書　鋼堂ヨリ薩英談別ヽ

某氏手簡　霜月十日

鹿児島戦争英人訪ノ紙之翻訳

神奈川宿板別段新聞紙一千八百六十三年八月十六日

文久三亥年癸亥七月十六

自横濱還人之話三條

還自太田吹嘗某氏話　某氏手留

大正 9. 5. 27 購求

高野藏書

十月廿四日 薩州儀銀十万元与英国使節書 岩下建蕃

○七月京師新聞

在京子喜良某ノ東 七月七日京発 十四日板代着

長崎之風多二條

横濱運糸売買人ノ書付二条 七月廿四日

笑艸二章

大坂風説十一條並琉球圖宝ノ事

丁吟宅ニ天誅ヲ弥ノ書付

今言ノ前ニ男女殺害ニ逢フ 七月廿七日

在京被差氏ノ書 七月廿六日 建春門守衛ヲ殺ス

同廿八日到大藤邸ヨリ

贈英弘官小品物目録

同上西塾察所掃除新聞五條 日信

小倉ヨリ六月廿七日出ノ手紙同九日着ノ話書ノ抜

在府某氏手留 七月廿六日

京師別條東国数四條殺害ノ家使西下ホニ

七月廿五日警顧寺三條大橋両所ニ張紙写

大坂日参館皇有守四道之罪科

蟄屋ヨリ至急差免又傷ノ評 七月廿七日

七月廿三夜三條大橋皇有小物屋卯兵衛罪條写

在京久保三郎ノ書取 七月廿六日ノ分 諸門衛士負刺若干姓名不詳当番申談ス

飛鳥井家ノ書付ニ咄ノ答ノ書

在京玉川氏手東四五ヶ

在京久保氏成ノ東八月五日再度馬場 天誅ヲ弥ノ書付ニ日記抜伸日長務ノ書面言ノ

○風諫状書按 七月中ノ両国後ノ海書ニ

五箇条和蘭ニテ答ノ書出ノ書ノ抜

同分松浦一郎建白 壱六月着

因州侯 天朝ヘ建言為親征不可延ノ事。

同分土屋民部幕府ヘ建言

越知逼植小傳 春雪楼遺稿書後 七月

○一揆ノ再辞職書

在京両奉察ノ書付、九ノ馬場 御覧ノ通

同上五ヶ條皇布並布市ノ勅額又焼高野寺ノ書付

在京薩氏同上同説

亜國ミニストル瑞西ヨリ為ニ條約ノ儀之儀ノ不完書

同上亜國ミニストル答簡ニ勢出ノ書ノ抜

松平春嶽公所存書 壱七月着

上杉修学老豊国ヘ建白二通及別紙

檄文 十二月 勅書ノ布告諸侯策略 御書付ノ抜ニ相成 山形ノ書付甲上 件々ノ儀御

○一揆ノ再辞職書

己正九ノ十條

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

○薩州藩士多衆　武臭云本書ニ所載如斯人談要多幸説必不可信蓋傚褒之抄看也

而敵状未着漫然ニ手ヲ束ネ孫田ニ営ヲ築キ多ク人数ヲ費シ徒ニ日ヲ送リ空ク兵粮ヲ費ス如キ事ナシ英国軍艦六月廿二日横浜出帆同廿八日鹿児嶋城下海岸ニ碇泊ス七月朔日夜ニ至リ俄ニ大風雨アリ翌二日午刻比鹿児嶋城下海岸ニ碇泊ス七ノ時鎖ル至テ大風雨アリ翌ル英国軍艦ニ艘ノ大砲打懸ケ有州方ノ人数撰ミ討合ヒ二日午ノ刻ヲ始メ三日辰刻迄大雨ニ中ノ争戦出火ノ光白昼ヨリ如ク此方幸ヒノ便ニ相成二艘ニ乗組居二人討死シ其セタフベーケン。イシントヨンニール討取ノ旗車討崩シ櫓打折ノ上無洋上ニ砂船ノ体ニ退帆ス

同時ニ同国ノ商船ニ艘途中ヘ連来リシ我後来ノ軍艦数艘ニ逢ヒ引返帆ス

ノ商船ヲ見ル多ク逃退ク跡追次第英船ニ乗ル二人ヲ生捕ル

彼ニ艘ニ積入荷物大砲玉薬パン商物其余小判壱万金ヲ

其ヲ鎗太刀長刀ニ類シ艘ニ餘リ有ル右生捕高麦四百人餘ヲ入ル字ヲ付
軍艦二艘南船三艘ヲ奪ヒ薩ノ
三日鹿児島ヲ五里程脇ニ港ヲ沖ヘ英國ノ軍艦四艘破損ノ修理
人数ヲ乗組ヲ以テ和ヲ結ヒ船漸ク
外ニ丹波ヲ別条ナシ付ケ船ヲ英國船討ヲ
行キ方ヲ人討ヲ前後ヲ待ヒ船ヲ移引ヲ討ヲ
ノ方ヲ誤リテ皆ヲ経ヲ人ヲ
ヲ待ヲ居ヲ二日午刻ヲ鹿嶋城下ノ海岸ヘ
ヲ陸船ヲ今ヲ三百ノ上刻近ク船ヲ
人討ヲ軍艦二艘南船三艘ヲ奪ヒ四百
ヲ経ヲ四人ヲ討死ヲ
ちりのつか

序ヲ長州ヲ再度ノ争戦ヲ
去月末北アメリカ船フランス船ノ艘英船ノ
ニノ如ク夜中大砲相撃ヲ長州ヲ
数ヲ午合ヲ砲ヲ引上ケヲ
篝火数ヲ所焚キ火ヲ長州ヲ憶測馬印ヲ
篝先三四町ヲ篝火消ヲ夜ヲ
ノ十有四方ヲ伏勢一時ニ起ヲ
ノ叡ヲ行ヲ地理ヲ
ク討取ル一手ヲ長州ノ
軍艦ヲ乗入ノ艘ヲ
ヲ方ヲ兵ノ

○横濱人自害并狀薩劦風聞書

英国軍艦七艘去月廿一日横濱出帆薩州へ參向當九日ニ鹿兒島湾へ入船
十日ニ五艘内船右七艘ニ内第一等船将アダミラール館ニ乘イラリス船同船
乘組ノ第二艘将コニヤシダア館ニ乘パイロ船パリシス船アカレ船
コウキチ船外名不知武本同ク艘メニ艘十四五里ヲ近ク内船ヲ
乗ル士官ニ十人程即死ニ人怪我人ニ夫ニ準ス可申狀右七艘去
月廿四日鹿児島入港第一等船将ニイラリス船アダミラール及コニヤシダア當日
ノ薩劦模合ニ相成船将ヲ人ニ上陸各ニ船中ニ鹿児島役人相招キ應接ニ相成ル
初双方穏ニ侍ニ変近ク船中ニ相招應接ニ後薩州ヘ西瓜ヲ送リ物等有テ
無ク英将ヨリ通弁アレキサンドルヲ以テ模合薩劦ヘ近暴悪不可言因テ今度右
償金ヲ取ニ可ラサル旨ヲ辞ニ見受レ右通ニ有ル者意違ニ英ヘ暴ニ薩州ヘ

持ち蒸気三艘奪取ルト雖但し償金差出ス旨ヲ以テ和成英軍
策略モ有ル可キ夫ヲモ知ラズ薩船ヲ捕ラント英艦モ亦速ニ
相待ツノ心ヲ急ニシテ及ビ機会ヲ失ヒ薩船ハ英艦ト大砲相発速ニ戦争ヲ和成ス時
半汁ヲ百石薩船ハ英艦ヲ来ラズ焼掃夫ヲ以テ薩人ヲ
捕ラントスルヤ二船将ニ二ツニシテ発カビタン即死其外上官ヲ始メ即死怪我
人出来鉄砲穴拾ヶ所ノ外ハ無事ノ有様ニアダミラール各事ヲ指揮シ
先ツ方ニ引取会事ニ有様ニ処置又ニ汗ヲ
シタリト
或夢物語曰和蘭商館ヨリ薩州ヘ送ル所ノ書翰ニ英軍
多分有之近頃開国論ヲ行ハルヽ故英船入港者ヲ
得ン為ノ多分有之ト英方ヘ又ニ数艘所ニ臨入ル義ヲ
懼レ多分機会ニ及ビ右船ヲ質ニ有之必ヲ機会ニ及旦夕引取
ル様英家ヨリ隊ニ命ヲ下ス者ヲ多ク大奔
去ル六日大砲方不意ニ薩ヲ砲撃ヲ始ル於テ
中ニ不止下賤ヲ右多年俸禄ヲ或ハ有之ヲ衣類等白カスリニ袴ヲ着
ル多クニ因ニ力ニ官爵ヲ有ルヲ以テ先ヲ下ニ有多ク即
死ヲ辞旦発船ヲ上陸ヲ敢テ船ヲ艘ヲ船ニ艘
ニ壊中ノ分有ヲ砲ヲ高六七十方ト伝ラルヽ英夷
等三等ニ有ル上有ヲ即死ヲ出ヲ残ル所アダミラールヲ
有ヲ十分ニ一ヲ出ヲ逃帰発ヲ四十六ヲ処ニ位
ヲ称子ヲ以テ英陥落後女ヲ吟唱等ニ於テ
存ル子ヲ父ヲ母ヲ有ヲ長州ニ大穴ニ

本文所謂蘭
紙新字紙
長州戦争
関連

五國兵ト石船衆近ヶ寄ス之ヲ実ニ故有テ事実和訳
多事ヲ為ス為ニ新聞紙上ニ記シテ以下英國ノ軍艦数
艘相招キ押掛ケ来ル旨説ノ如キ全ク無根ノ流言ニ
テ外国人ニ対シ不信ノ挙動ヲ為スノ意ニ非ス
近頃横浜開港ノ行ハレ近浦ノ人民ヲ初メ各国ノ
人ニ至ル迄交易ノ利ヲ得ルノ如シ此後ヲ以テ一層
近浦ニ来ラン事ヲ欲シ十分ノ利ヲ得ンノミ
敵ヲ為ス処ノ又其ノ一ノ為ニ非ス初戦ヲ
但英軍艦ヨリ上陸ノ節小銃ヲ以テ発砲ノ者ハ
ノ義ニ付蘭紙新聞紙一枚ヲ得ンヘシ英仏新聞
近日入港ノ節ハ一ト先ツ新聞紙館ヘ買ノ度ヲ得ヲ市人ヘ容易ニ写取ラシム
又ハ自主ノ住ノ者ヘ写本ヲ品川氏宇本人ヲ招キ
ノ事ヲ

○於日本横濱一千八百六十三年 文久三年七月八日

一 英國コロモン名船支那上海ヨリ渡来シ海上薩州ヨリ同士艦ヘ書翰ヲ得テ刻下當港ニ着ス
則下條ノ新聞是也

一 英國軍艦鹿嶋ヨリ砲洲中日本七月二日午刻風吹起ル人ニ如左

一 カピタン館ニヨンスリンク及コニマント館ウエルモント外ニ一弾ヲ死亡外ニ負死人ハ六十人ハ各
船多サノ損傷アリ

書翰委細ハ記載スルヲ不得只英大要ヲ摘録ス

一 日本七月二日午刻砲墓ヲ打出ル ニ依テ我水師提督直ニ相圖ヲ為ス薩州船エンケラント、スルヲルシレー、コンテストの三隻ヲ焼摧〳〵右船々今朝ニ至テ我敵隊の傍ニ碇泊セシもの

一 彼ヨリ打放セル ニ依ル我軍艦砲ヲ揚ル六町隔テ陣列ス

一 砲墓ヨリ射放ス弾丸ハ〳〵殊ニ大砲ニテ此中八寸或ハ十門ハ径八寸ノ破裂丸及ビ四ノ或ハ三ノ丸の実丸ナリ ○放ス人ニ依テ

一 ケピテン館及コンテンド館同日未刻甲板の上ニ一弾丸ニ手殺又八寸ノ破裂丸甲板の中央ニテ破裂水夫七人即死ス人ネロイテナント チヨースル ヲ負ス

一 同日天気悪敷雨降テ風強ク吹未刻校大砲下ス 同刻ヨリ我砲撃ヲやむ

薄暮コンホート船ハルク船 五隻の大船焼〳〵大船ハ琉球船ヲ及高家焼失セリ 夜ニ入 城下及造作場

一 翌三十六日 三日 日本未中刻砲ヲ上ケ港口ニ出ヲ城下の砲墓ニ破裂丸及実丸ヲ打ツ小彼ノ為ニ破セラルハ只二ケ所砲墓ノミ

一 我碇泊セル所ハ砲墓ノ弾丸ヲ避ル為ニ

一 城下ヨリ夜ニ入リ烟火尚炊ノ〳〵シ

死傷ノ者左ノ如シ

一 ユライリス船 死人十人傷者二十人 内二人死去 一 ヘーアルヘリ 死人七人傷者一人士官内一号ロイテナント死

一 コツケット 内一人 一 ヘルミウス 四人傷者二人

一 アルコス 傷者二人 一 ライスホースノ 傷者二人

一 ファウラック 負事 都合七隻

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

○英仏両国薩邸と戦争之事

英佛南蛮軍艦七艘六月[illegible]日頃より薩邸を押寄
と申込候方有之候を承知之旨を以七艘と儀に包み
程なく薩邸に沈之英人数多殺害被
申候得共薩邸より英人へ手向仕候儀は決而無之
又々退帆　右一条より新橋土蔵七英国人本店
十二月幡川英人仮宅永田馬場原屋敷
五ヶ所西洋砲手五ヶ所右両仕立居候
戦西洋本店かと申之一説有之候得共右薩邸
多数押寄候儀に付万一之為
○七月十二日朝神奈川奉行所より名前書
前出候

お屋くち出ー仕ま支

薩ガ兵ヲ率ヒ東ニ海ヲ航シ地ヲ西上セント径東ニ英
ニ守衛ヲ増ス府要地厳大ニ守衛ヲ立申径ニ延ビ
被押寄ル好ニ大砲打ヲ放ヒ要地ヲ打砕ク事能ハ
ザリシ故ニ英人多ク上陸シ之ヲ防ク合
ニ及ヒ終ニ英人ノ為ニ生捕薩ガ死亡ヲ英私ニ被奪ル
一般彼私用ニ横濱ニ到ル日ニ至ル迄ニ船ヲ以テ
右ノ外ニ英国ニ出ー説ニ家老ヲ質ニ出ス事ニ
拵作六月中旬ニ一等ニ等ノ切ニ兵ヲ出ー万ニ海ニ
方ヲ守ラシム又ニ荷物出ル引ク切事ニ
品左ノ如シ　七月十ニ日

右ノ通ニ候也

○薩州別條

六月中横濱港ニ於テ英軍艦七艘七月二日薩ガ鹿児嶋ニ着ス直ニ應接ヲ積
リニ海岸近ク船ヲ寄セ家老ヲ乗セ午時ニ
居ル所ニ時雨風強ク船ヲ迅速ニ走ラセ地方弥近ク砲ヲ
俄ニ大砲ヲ打掛ケ時ニ軍艦數艘ニ増シ其軍何心ナキニ
ニ大ニ驚急ニ打放ノ用意ヲ為シ海陸共合ニ相成右ノ午ヲ刻ヨリ戌ノ刻頃
近双方砲發致ス内英軍焼玉ヲ打放ス薩ガ人家數多焼失鹿児嶋
城下モ餘程ニ延焼ニ及ヒ今始ヲ以テ鎮火ノ如ク市井
町人ノ死失モ大ナルニ至ル其日薩ガ方戦争ニ向ヒ士ヲ且大ニ
ニ焼死ノ人民ハ凡ソ大凡ニ千人程死亡ノ如ク英軍ニ方ニ十人程死失
右ニ番目ノ船将二人戦死ノ如ク九日ニ経テ戦争上陸ニ及ヒ

と取合さる〻海陸軍艦の打合ゐる事ゆゑ且又薩加軍艦八艘
英の大砲ニ而多く海中ニ陥没のよし尚又薩艘
常と琉球ニ住来致し候ニ付薩の人数ニ而英軍
損ゐるゆゑ相英船と薩州砲ニ而破壊さ者ゐる仁の
とう航海ニ出来ず仍而英人自国ニ退帆右ニ付三度ハ追ひ横濱ニ来
よし之事

右ニ付九日横濱ニ罷越候ニ仏国紀行当生ゐる方ゟ
亜墨利加人ゐる方ニ事ヒコゾウゐる方ニ而薩州ニ多相尋ゐ事ゆゑ左ニ
ゐ〻ゐ通ニ而ゐる事

○薩州ゐる戦争ニ而多数の文書ゐ中ニ彼生麦一条ニ付英国軍艦八艘薩州ゟ
事ニ而ゐる〻風聞ニ而ゐる事

一 英国人薩州ニ而殺彼生麦一条ニ付及談判ニ而薩州ゟ
州ニ而ゐる向ゐ通ニ而砲術ニ而ニ或ハ而ゐる九ゐ頃薩州軍艦ゐ
ゐ〻ゐ米国人弐人外狼狽ニ而去ゐ後英国軍艦ゐ
艘大破迄ニ銃撃ゐ而盛ニ煙ゐ時ニ而ゐ薩州ニ而ゐ
外ニ而ゐ井ゐ而去仁ゐ而ゐ謀略ニ而ゐ一つゐ而ゐ
上陸ニ而ニ而ゐ而ゐ而ゐ薩州死亡多ゐ者ゐ英国ニ而ゐ
将両人打死ニ而外ニ死亡多ゐ者ゐ薩州ニ而ゐ
二日ニ而ゐ程ニ而ゐ而ゐ而ゐ

右ハ英国ゐ新聞紙ニ而ゐ而ゐ由ニ而ゐ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

許し英国人も随意に上陸する事を得る事を
一英国軍艦薩州より和風並に官員我等の乗る諸
々向ふ破船致す事を又ハ日本の法を以て英国船
并に軍艦ハ破す向ふ破す英国船ハ三艘共破船
旦那下ハ焼玉并に石火矢等二ハ発せざる事
我等ハ勿論ハ火災ニ死る者多ク有之候ハヽ
各国ニ、先ず下ハ勝手ニ為すべし
右ハ紀州ニ於ても度々英人ニ対し
ハ者ハ右ハ或人云ん九日横浜発天通ニ行
条約の写右ハ通り

七月十四日
○薩英英国戦争実見ニ付
今回孔平等横浜ニ町人甚忠右ニ者ニ而度薩
薩ハ在藩ニ而会ニ於ニ多細ニ見実ニ当十四日等
ハ生ニ而ハ実ニ当一通ニ而ハ止ニ孔平ニ字ト英船
薩船ニ等生ニ一条ニ而ハ上陸ニ於ニ而ハ
ニ英国ニ上陸ニ於ニ右ニ有ニ多船ニ薩ニ
政ニ不先ニ於ニ於ニ薩ニ過半ハ開国ニ論ニ相唱ニ
条若者ニ而ハ西洋ニ不薩船ニ
通ニ而ハ官ニ者ニ心得違ニ而ハ中ニ薩ニ
ニ而ハ一ニ政ニ難ニ計ニ而ハ薩ニ軍艦二艘ニ
ニ而ハ船ニ於ニ而ハ賠償金ニ而ハ出ニ
ニ而ハ機会ニ而ハ感ニ而ハ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

始末故攘夷ノ総ノ者雄忽薩ノ大砲ヲ打懸ケ中一隊薩ノ戦争
ニ及ヒ薩ノ軍艦蒸気船六艘内ノ元英国ノ蒸気船ヲ奪取ル和戎丸ノ中ニ
破壊軍用金千両用達ノ為メ横浜ニ来ル中打合一時余ノ後薩
ノ船ヲ乗シ味方一致ノ攻ト中打合一時余ノ後薩
人数繰出シ軍相始ルヲ中ニ英国ノ将三人ノ討死大砲ニ当リ
将ニ至ノ七艘ノ船ヲ従ヘ十日ニ横浜ニ来リ船ニ大定英国由
兎ニ角ノ手ヲ以テ横浜上陸ニ決シ軍ノ話ニ先ツ談判ノ為メ
上陸ニ及ヒ談ヲ以テ薩ノ方ヘ上陸ヲ談ノ為メ
中ニ実ヲ知ラス死失ノ千人薩ノ方
計リノ為メ中ニ先軍ニ来ル者ヲ捕ニ一ノ者ヲ捕ニ
者又英国ニ大将ノ手ニ入ル者ヲ捕ニ
ノ先ヲ以テ英国薩ノ物ヲ改上陸
ニ全ク薩ノ為ニ逆ヒノ為ヲ以テ
孤難深ク設ケ大ニ破ル事ヲ薩ノ手段
ニ及ヒ薩ノ方ニ被害ノ有ル
ク実ヲ知ラス

○京都風聞書　在京玉川一学申来ル
同藩津田勝ヒ

七月三日中国西国辺大風雨ニ而大荒因州抔ヲ早稲ヲ穂ノ外一株モ用ニ立
大荒ニ而当三日因州泊ノ者京着相噺ノ内備後屋八兵衛申ノ
一美国ノ弘薩州沖ニ十一艘先達而長州ノ戦争ニ頃ノ相見ノ者ノ加ル八海岸ノ
用意有ノ港口水中ニ鎖杭ヲ打ノ事ヲ世話ノ々ノ
者又英国ハ大将ノ手ニ入ル者ヲ捕ニ
ノ先ヲ以テ英国薩ノ物ヲ改上陸
ニ全ク薩ノ為ニ逆ヒノ為ヲ以テ
孤難深ク設ケ大ニ破ル事ヲ薩ノ手段
ニ及ヒ薩ノ方ニ被害ノ有ル
ク実ヲ知ラス

○京都風聞書　在京玉川一学申来ル
同藩津田勝ヒ

七月三日中国西国辺大風雨ニ而大荒因州抔ヲ早稲ヲ穂ノ外一株モ用ニ立
大荒ニ而当三日因州泊ノ者京着相噺ノ内備後屋八兵衛申ノ
一美国ノ弘薩州沖ニ十一艘先達而長州ノ戦争ニ頃ノ相見ノ者ノ加ル八海岸ノ
用意有ノ港口水中ニ鎖杭ヲ打ノ事ヲ世話ノ々ノ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3
ガラス使用

備付ニ相成右同志ニ於テ一度ニ借下ケ右様堅固ニ相備置万一先方ヨリ手
ヲ下シ、打掛ケ申ニ於テハ無論ノ事ニ候ヘ共、万一ノ大風ニ而大洋ニ大荒ニ而右繋ギ綱ヲ切リ十一艘之夷
船ニ而モ地方ヘ近寄ル事能ハズ前條長崎就中十艘ニ打放ケ砲撃ニ海中ニ石ヲ積ミ
打ち薩州方ノ軍艦ニ打掛ケ多ク敵ニ近寄敵ニ打散シ十一艘之内四艘ハ逃去候艘ハ微塵ニ
砕キ五艘ヲ薩州ニ奪取ル私将ニ大勝利ヲ得ル事ニ候ヘ共ニ万一ニ
モ右ニ申ス如ク打掛ケ申ス事ニ候ハヽ敵ハ必ス一ノ秘計ヲ
以テ
七月六日夜認書

○右ニ申ス砲撃ニ付テハ多ク先ヲ右ニ次ク左ニ次ク打掛ケ申ス事ニ候ヘ共ニ
ハ必ス一ノ秘計ヲ以テ

○英国千八百六十三年第八月廿一日横濱新聞我七月八日

英国軍艦コロモランド書状ヲ以テ當港ニ只今着セリ右艦鹿児島ニ在ル英国軍艦ニ
逢次ノ新聞ヲ持来レリ去ル土曜ノ日私七月二日午十二時午時軍艦鹿児島ニ入後ニ
砲泊在テ大尽吹ノ日本人ヨリ打出セリ不幸ニシテ次ノ人コロサル

カピタン艦将ジヨスリングノ人名　コンマントル大将ウイルモット人名

右両人ノ弾丸ニ打殺サル乍爰死人六十人艦ニ多少ノ損傷惣軍艦當湊ニ帰リ来
ル近ニアリ　書中之文　巨細ニ論スルヲ得ス唯　其大要裁スルノミ

當十五日第十二時臺場ヨリ打出ス水師提督直ニ合図ヲ成ス日本艦ヲ焼ル事
三艦捻仕ヲ蒸気セ　艦号　エケラント・シルミナル　ジグレー・シマテースト

右者横濱亦右長崎ニテ買フレタル艦也修ミ砲泊アリシ也臺場ヨリ打掛ケルヲ以
テ軍艦砲ヲ上ケ臺場ヨリ五石ノ玉六石ヤルトヤルト二尺余離レテ一列ニ連レリ臺場ヨリ討
乃至

タルハ甚ニ強キナリ。殊ニ大キサナインチ一尺余ヒケン弗コンマンドルハ午後弟二時二分五重須甲板ノ橋上艦ノ高キ所一弾丸ノ為ニ即死スヌナインチノ破裂丸甲板ノ中央ニテ破裂シ水主七人即死午負五人ロイテナント安名ヲヨフス人名一人譯者曰右者ユライリス艦号事ニ天気悪シク雨降リ風陸ニ向テ吹ク午後弟二時火府中ニ記ル弟三時半三分發砲止ム弟七時十五分ニ小軍艦ハワアツノ五艘ノ琉球船ヲ焼ケリ弟九時二十分ニ造化場及ヒ高家焼ルニ付造化場ホニテ掛ル事終夜弟八月十六日我弟七月三日午後弟六時三十分碇ヲ上ケ蒸気ニテ湊ヲ出掛府臺場ニ向ケテ共破裂丸又ハ実丸ヲ発スル者ハ二ケ所ノミ碇泊セル所者臺場ヨリ丸ノ遠ク所ニ

譯者曰此度目ニ掛リタル午負人目録

艦号　ユライリス　死人十人　午負廿一人内一人死ス　同
同　アルゴス　午負二人死人一人内ユケット　同
同　ペルシウス　死人一人　午負二人内ライホース午負二人　同
同　ハワツノ　死人午負ナシ　同
同　ベール死人七人一人士官　同
午負六人内七イテナント一人死ス

右ヲ英国軍艦鹿児島ヲ出帆致シ本国ヘ引取ノ途中ニテ支那ノ上海ヨリ横濱ヘ通行ノ船ニ行合ノ節戦争之次第ヲ掛ケ合ヒ傳達致ニ付其侭ヲ書取横濱ノ役所ヘ申立ノ由ニテ写

○文久三亥七月四日薩州候ノ屋

去月廿八日英船七艘城下ヘ漂来ヲ稟ル是非ノ為ノ由面ヲ以テ可致ノ為ノ解キ、夫ニ而モ船ヲ引出シ既ニ出帆ノ形ニ見受ケ午後砲発ノ音ヲ聞ケ三ノ迄又拝穫即日城下ヨリ十里計リヘホン士船ノ内ヲ艘砲発ノ船ヲ以テ我ノ全体攘夷ヲ御聞ニ及ヒ彼ノ非ヲ責ル為ノ由ニテ其後ニ止由面ヲ以テ一ノ条ノ金子ヲ求メ彼ノ非ヲ責ル為ノ由ニテ其後ニ止由面ヲ以テ一ノ条ノ金子ヲ求メ彼ノ非ヲ責ル為ノ由ニテ其後ニ止

生麦一条ニ付

当ノ申ノ通ニ而ハ不申事ニ而ハ無之ト申ス説モ有之ト雖モ其説ニ而ハ不申事ニ而ハ無之ト申ス説モ有之ト雖モ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

七月廿四日晴日出

○

六月十二日横濱出帆
同月十八日鹿兒島着
七月二日長崎着
同月廿四日出帆
同廿八日三艘同港

英國軍艦二艘
水先案内
松作

○

六月十二日昼九時武州神奈川港七艘出帆薩州鹿兒島港へ同月十五日着
夫より薩州より為警衛役人英國軍艦一艘引連後直ニ港へ着ス薩州ニ軍艦二艘ニ而英國蒸氣ニ三里程伴合ニ引出ス右三艘ニ一艘ニ而為船附壹ヶ所ニ水夫并役人共勝手ニ而上陸可致旨英人申談候ニ水夫共ニ上陸ニ而役人ニ而ハ上陸ニ不及旨申ニ付乗組之面々ハ銘々ニ上陸

中ニ碇泊致置申ル舟ニ一番帆柱ヲ止ニ居候得共別条無之舟ヲ打抜申ル共ニ水
をとめ居候陸ニ無之候而ハ不叶家モ多ク有之又焼失ル町家ニ有之候社
焼失ルニ付其ノ柱ニ相見ヘ戦争中止陸ヲ一切ニ取払候得ハ戦争中ニ甲板ヲ上ケ了
トミラール武人並居遠目候ル始終ヲ指揮致候ニ実丸発筒ヲ人ヲ臆
ス有ニ付ケ人ヲ打ル口中ニ打抜ク柱ニ付ケ人数ハ何
ニ而モ舟ヲ打抜ル候ハヽ舟将ヲ始メ多人数ヲ即死致候ニ何
外一艘ニ付十五六人位ニ而悪系有之柱ニ付ケ即死十三人怪系人五十余人有之
候ニ付
一英国ノ舟数ヶ条有之候内ニ申ル
ニ舟七条次ニ条ニ於テ
右之通ニ有之候ニ付申上ル

七月十七日

文久三年亥六月廿八日ヨリ七月三日マテノ見分ノ次第　富吉九之助聞取記之

○薩州鹿児島ニ於テイギリス舟合戦実録　北山安世所贈　安世游学在長崎

文久三亥六月廿八日七ツ時鹿児島ノ二里南ノ谷山ト申ス所ニイキリス舟七艘
尤モ此所ニ墓場ナシ然ル所薩ヨリ使舟ヲ以テイキリス舟ニ
ヤ招此度当国ニ参リ候ニ付金子八萬両米三萬石ヤ受度
段相談ニ才ヨビ是難題ナル趣ニ掛合ニ而(本ノヽ)ニ(ママ)と是初ヨリ左モ無之時之間
相待居ル其刻限マテニ否返答ニ及不申候ハヽ併当時之美飯鶴両ハ十ト
トヤニ付翌廿九日早朝小舟ニテ積送リ候ニ付少シモ受取餘ハ返シヤル且イキリス舟七艘
芝昼夜車の火をタヤサス用心堅固之体鹿児島ニハ評議區々先ツ浜辺の町
人早々山々在々引越ニヤ相サ九日早朝ヨリ触あり待モウケル町人上を下と

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

騒動大方ナラス扨七拾万石の城下之町人山在ら引取事御ノ齒ヲ引カ如シ又
他國商船地船同琉球船々ニ心此ヲ力遁ル人キ旨ヲ触ル浮芝沖風浪強ク
詮方ナク艾促ツナキ居ル所淡州舎津浮亀丸儀助ト申船一艘碇ヲ揚帆ヲ
揚ケントシテ地方近辺詮方ナク艾促ツナキ居ル所七月二日大風雨破船致候赤薩州
ノ異船造リ三艘ハ國分ヘ乗廻シ置ヤル所七月朔日寅刻カイキリス船碇ヲ揚ケ城
下ヶ八里北海ノ國分ヘ走り込薩州ノ異船ヲ三艘ヲ奪取櫻島辺マテ引出シ然
ル所翌三日如上刻薩州イキリス艾相知ネヤル浮芝石火発声鳴響其砌リ
鹿児島ニハ鐘太鼓洞貝吹立惣方石火矢山谷ニ響キ彼ノ響ニ高船の加
子皆ヲ兼ル由扨又卯ノ下刻薩州赤異船ヲ櫻島前ニテ焼捨残三艘ハイキ
リス船ノ元脇ヘモヤヒナガラ七艘順々ニ乗廻シ巌重ノ船備城下櫻島ノ茎
場ヘノ前ニテ七艘ニテ順ニ石火矢ヲ射カケ又薩州ヨリモ廻ル来ル異船ヲ茎場
ヨリ射カケ尤モ異船ハ鹿児島ヨリ櫻島ヘ海上一里半廻ル三里余ノ海岸ヲ
廻ル事依大雨風浪ト雖モ自由ナル飛鳥ノ如シト誠ニ前代未聞ノ事ニハ然所
當時元脇ニモアイ付ル薩州異船造リニ火ヲ掛ケ放シ又一艘ハ八時ニ火ヲ掛ケ
同ク切リ放シ両艘艾焼ナカラ砲崎トヤ茎場ヘ流来夫ヨリ七艘三里廻リヲ
射廻ル矢玉茎場ニ当リ石茎ハ悉ク破損ス茎ハ格別ノ事モナシ薩州方ノ石
火矢勢ニシテ遠行セス尤モ風向ノ一二ハ弐異船ノ一足ニハ弐里半二里バカリ飛テ
弥ノ当リ然中大風下射ル故ニヤ異船ヨリ射ル矢玉上町トヤス町ニ飛来ル硫
黄蔵ニ当リ大雨風ナレトモ硫黄ニ火ウツリ上町三千軒バカリ焼失黒煙城
岸ヲ包弥勢ノ薩州方甲冑馬上ニテ馳廻リ駆動半ヘ来リ或ハ城内ヘ三ツ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

も乗来り琉球船に当りい漸く高船へ一矢モ当ラス且琉球船に火矢ヲ掛ケい漸
く薩广墓坊ノ所ハ櫻島辺ニテハ城山鹿児島ニテハ天保山上町下町磯
崎四ケ所ノ墓場ヨリ射カケ出スト雖モ矢勢落ノ届兼当ルト雖モ異船ニ難
立薩州方ニハ歯キシリカムト雖モスベキ様ナシ最早日モ暮ニ和及想方石火矢
シ止メ薩州ハ夜中カガリ火ヲタキ用心堅固ニ備具ハ端々ハ密ニ軍勢ヲ廻シ
置い所二日夜四時彼大風の中ニバッテイラヨ乗リ移リ琉球船へ参リ四艘共悉火
ヲ焚ケ焼ウケニ致シい漸く共島津方ニハサノミ手出シモセズ夜中ノ事ニヤ何事モ
ケ之い翌三日早朝異船出帆共砌異船ヨリ石火矢ヲ放ケい漸く共遠方ノ事故行
事モ不之薩广方ニモ相手ニナラス然ル所櫻島ヨリ一里斗南ナル「オユシマ」ト云
小島ヨリ射カケル矢玉異船ニ当リ玉艘ハ柱ヲ射折リ又一艘ハ釜口ニ当リ
両艘ホウ〳〵ノ体ニ相見へ然ル所五艘の異船彼破船へ走リ寄の出サントスレ共千ニ
島北ノ方ニ砲有地方ハ谷山北ノハナニ洲有此洲ニ当リ出兼い所ケ此破船ヨリ
旗ノ如キ者ヲ挙ケレハ又一艘ノ異船馳迎リ二艘ニテ追々石火矢ヲ放ケ車
火ヲ大ニ立テ程ナク引出シ共又一艘の破船ヲ雑船二艘ニテ引出シ共後十
日頃マテ何事モ不之座い候鹿児島城下ニハ下町ト申海辺ノ町ヲカガ等ヲ
以テ引タオシ軍場ニ致居いマテノ事い

一七月両風ハ肥前ニテハ二日ノ巳時ヨリ南両風彼大
風波ニ異船ハバッテイラマテ自由ニ乗廻しい異人の振舞島津様ニモ感心
被遊い由共後何如致い哉異人二人流寄諸人の話ニ薩广ノ異船の番士
奪レい砌海中ニキリ落サレい者ニ有ンヤと申居い

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

一肥前天神丸弥助砲軍事の砂鹿児島上町墓場ノ側ニ風浪ヲツナキナガラ余義ナクコワ〳〵見物致ル人モ危カリケル事共ニ拠右軍終リテ翌三日早朝船中共十三人彼上町墓場ノ上異人ヨリ射カケシ矢玉ノ割レヲ数々拾ヒ持還リ之を見ニ割口凡サ一寸五分許中洞ニシテ五六寸迴リナル捨子ロアリ玉ノ金ヅクニシテ捨子ハ唐金也

安世丸横浜新聞紙ト申者至テ詳ニ写ヲ取テ図面モ有之砲台ノ種類異船ノ乗込ノ模様皆分明ニシテ此ノ座ノ浮説是ハ手近ノ義ニ付既ニ可有之ナル不入ノ説ヲ此ノ風説書基節文ニテ此ノ座ノ浮説実録ニテハ之ヲ見合ノ義ニテ無之ナル不入ノ説ヲ狩此後新聞入手ノ節ハ更ニ可申上候以上

如此則薩州鹿児島内海探索ニアラヌシ安世丸図ハ入手ニ難相成ル

鹿児島戦争英人新聞紙之翻譯

○日本之交易ニ関係ル神奈川開板之別段新聞紙一千八百六十三年第八月廿六日即我文久三年癸亥七月十三日

薩州鹿児島ニ於ケル英国ノ船隊戦争ニ及ヒタル諸事件近頃我輩ノ最感ス處ニシテ交易會社ヨリ戦争ノ便信ト倚薬ニヨリ故ニ定式ノ新紙ヲ開板スル事ハ一両日ヲ延シテ此ノ緊要ナル新紙ヲ速ニ得ル為ニ出ル事ヲシテ実ニ前条之事ヲ人〳〵

鹿児島の戦争

今茲ニ記スル英ト薩摩ノ詰問ハ始ノ事件ヨリ但シ近頃厳重ナル開タル鹿児島ニ在ル處ノ君子ニ不幸ニ逢ヘル住民数千人若シ此ノ事ヲ至テ我兵力ヲ堪ル事ヲ知ラニ至テ我ニ敵ヲ国境ト受ル為ニシ今義ト理ト兼具スル盛義ヲ於テ勇闘シ死スル者ヲ朋友之ヲ

悲傷ならざる勿論、我軍亦大に之を知悉せしと雖も此戦争の始終を観察し
我損亡と以て敵の損亡とに比らべ、其功績亦豈かに出る所以を少しく心を
留むるを要る
是の如く数謨まして且つ年額ある艦隊の所行を東方の人（支那日本等の人をいう）と惑をし
遂に自ら国辱を招くに至りしも、但し従ひ来今の勢実に如此なるに雖
とも今より後若し之を悔い改悛して此人亦直に怜悧
の人となら人と敢て疑ふべきまでもあらず是等の事我輩亦大に希望所あり
但し今度敵の暴業まて自ら大なる損亡と招きしかば日本まて提督コ
ープルと名ら且つ英船隊の名大に盛るるを至れり英国船隊第一等の頭なる
提督コープルの幸運と我輩英国政府の為に祝せざるを得ず
して最も烈しき敵炮の向ふ所悪しき天気の挽令を冒して戦ひ勉めて我
兵東方まて海軍の勢と顕せしと名誉を得るといふべし我輩我軍
損亡を論ぜず人皆頗る此提督の勇猛強敢なるを賞美して此将
を既に以て此の如く偉功を奏せしなる事うべき大なる之と崇敬す我輩
亦大に之と喜ぶ
英国ミニストルコロネルテルを船隊の全権と握らく本月六日（我六月廿三日）当港と出帆
して鹿児島まて赴けり但しまだ廿七日（我七月八日）迄は我輩を我飛の事まて能く行事も
知らざりしの交易蒸気船二隻追々上海より当港まて到着なるが故まて此蒸気船
共海路とさまざまの事我承知せり又当月廿日に
モラント船到着せし故此船中の人より広く新聞まて大まに感ずる事

なり是故に我艦速に之を発航して世子を右の船来るを一時と過きにし又最も肝要なる報告ならん事我艦社中の大喜悦と云べし

我會社の鹿児島に赴きたる者より差越したる報告の容子を英の私隊壮麗なる鹿児島港に就く程の美談なりし拡まるを速みに世に公布せん事玆大に楽む居たると云ふ古昔共近邊の鹿児島(衍ナラン)の盛に

同じく遂に市街に近づきたるなれども其甚だ深きが故に碇泊の妨となるを以てなり

但し汽車最近の處に数隻の日本船碇泊せり尤も其内にて最大なるものは琉球船なり

(英国の私隊を水曜日の朝第八時半過(我五時過)頃提督のごとき任

(本月十一日(我六月廿七日)午後我船隊市街と距る事南へ八里と隔て碇泊せりと雖も碇泊の形状を港の岡を見て知るに容易なりしかども其深き甚大なるが故に碇泊處を探るに数尺の綱を

やく碇泊したるに薩摩の役人二三輩来りて英國の船隊と何故ありて此處に来るや尋問ふと見えて

(コロテル テル)

を意う日本語和蘭語等に英語ホまで認めある英国の詰問書を此役全渡して之を鹿児島の重役に達し呉よと述べたり但し之を渡すとき其答書ハ

十三日(我六月廿九日)午後第二時(我八時頃)迫に差越されしと云事を云聘あり然るに十三日

ホに至りて午後第三時(我八時半頃)頃ホ新政の次席と称へ衙士四拾人を率ひて提

督の船ホに来りて昼き蓋し戦争の以前ホ提督船の容子を探索せんとて多人

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

飯を喫し来りたる者あり然るに右重役の跡より一隻の端船あり使者来りあめて重役の者を立呼ぶ依て此使者来りて直に事の移転変更を見一重役を立呼ぶとき衛士一同此端私より来りて移るべしと命じて立呼ぶ此に又使者を行前心を揃む事なりしかも暫くの間答書を差出すべきや否やと考へ居る体なりき

此夜第八時我五時の頃より重役の者再び提灯の私より来りて薩摩薩广侯と云及び上坐執政の書翰の日本語に認めたる者とコロヲルニールより渡したり仍て此書を翻譯するに多少の時刻を費やす故より右公書より就くニール我存念と述べる己を以て翌日迄延引するに至れり依て其後ニールを此公書を見るに及ぶ中より認めたる趣意英国の詰問書より數ヶ条、尤も不肖なる

ものありて頗る重大なる事と見へたり依て其翌日より前日の答書残之あり
んとて薩广の役人又船に来れり此故より此役人を前日の書翰重大の事ありる
事と属ヤ暫け此段私より来る時を必和睦之旨と共に速く来るべしと
告け置てるり○我輩薩广の答書の写しを今茲より記載して看官好新の
意を喜しめんと欲にと雖も未だ之を得ず
唯人この談話を聞ける大略を茲より載す
薩广の執政書翰中より認めたる所蓋し左の意味なるべし

今度貴国より差越たる詰問書のうち私くしも幕府より我高を
の君薩广侯を云ふ より報告せられし事決して之なきの償金催促の事を足下之
我幕府へ申立てるべし其所以を我君より幕府閣老よりの詔勅を受取るより

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

ゐるゝ八此ゝ了件ゝ就ゝ彼是取計ふべき事柄ニ
ヨリカルドソンと申候者ゝ殺害ニ及候
と知ゝ雖ゝ其時為津ゝ事ゝ如何取計らひゐるゝ否や我君之を
知ゝ候ハ日本ゝ於ゝ故ゝゝして人を殺セ者ゝ厳科ニ處セらるゝ
勿論ゝゝ故ゝ速ニ彼者を穿鑿セんとカを盡ゐるゝ如何ゝゝ之と尋
出ゝ事能ゝ是ゝ決ゝゝ外国人ゝ殺害ニ及若ゝ其罪人と
取押ゝ事ゝゝゝ直ニ其者を引出しリカルトソンを殺害したる者ゐ
と雖ゝのゝ法ニ事ゝゐるゝゝし足下等を欺罔すれハ我君の榮名を
汚ゝゝ右決ゝして右様のゝゝ為ゝゝゝ然ゝゝ我君を大君の外国人ゝ
取結ゐるゝ條約ハ権現様の法度に背きゐる事
本ノ誤カ

あるハ是の如き場合ゝ至ゝゝ唯大君を人ゐる事ニ
の法度ニ背ゐゝ外国人ゝ日本ニ渡来ゝゝ許容ゝ旦ゝ自在ニ歩行
ゝゝと許ゝゝ日本諸侯の旅行ゐる事能ゝゝ至ゝしリカル
ドソンを殺ひたゐ日本の法律ニ背ゐる事ニ非ゝゐる故ニ我君の過
失非ゝゐる是ニヨリて考ゐゝゝ足下等ゝ詰問ゝゝして採用ゝゝき
事ニハゝゝ

是ゝゝゝ我等ゝゐゝ此旨ゝ答書を最ゝ重大ゐる事ニゝ
ニ大義を起ゝの源ゝゐゝゝ又大・私ハ奥を焼ゝする事ニ至ゐゝ
備ゝ内二三度ゝ外国製造ゝ葱気ゝ私ゝゝゝ砂糖ゝの高價ゐ荷物ゝ積ゝ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

火薬庫ノ事
處說

なる者あり又二三ヶ所火薬庫を打毀ちし場数ヶ所を破壊し殆ど鹿児島の市街にて諸産物多く且製造所鋳造所ホド外城郭迄悉く灰燼となり此破壊せる諸物件ホの負数を量り難く又戦争中市街当ホ於て死傷せる者其数挙て数ふべからず

薩ノ兵士提督ホ船ホ来りて云いけるは曾て全権コロ子ル ニール等を招待せる薩ノ役を蒙ノ殿堂又城中に招き薩ノ人を促しせる詰問書の取扱をなせる後ホ考きて此事迅らく、提督より然る此事を終ホ全く空くなりたる後ホ考きて此事迅らく、提督并全権コロ子ル ニール等を陪賓に陪ノ入れんとせるの策なるべし若し提督ホ此策中に陥ノ入れんとせるの策なるべし若し提督ホ此策中に陥ノ入れんとせるの策なるべし若し提督ホ此策中に陥

き最も好き港なりて港口七八里の洲ありて諸艦場之内我見殘せし者を唯
一二る迄午後八時九十分我夜五時過頃より市街より南方に凡そ八里を
隔て深さ十七尋の處より破沿せり之を測量する事大よそ難し
十二日 我六月廿八日 午前第七時半頃 我六時 錨を揚げ鹿児島の市街に向け進みし
深サ二十尋より十五尋の處より我鳥島と市街の南方なる岬の間と過
り我船の右側を見やる洲と過ぎるより午後第八時四十分 我夜の五時過 より市街近
二十一尋の處より到り市街と見る迄備と嚴重よろしく艦場に兵士充満し
く薩广の旗章を翻し居りより其艦場ハ市街のお面より併列して丈夫に数隻
の大船有て支那船五隻と繋きありと我艦より市街と離き碇泊せる後薩
广の士二人端船より来りたるにて詰問書と交着せし後第十三日 我六月廿
九日午後第二時頃 我八時頃 迄に来るべしと約束して同日午後第三時八時半過一人の報
政府の者一隻の端船より乗りて衛士四十人と率いなりて支衛士悉く害集
るもと付く乗船しより乗り移りて又一隻の端船来りけきも報政府の
者云いけるに右答書中より過失ありて我今上陸して再び来るべしと云う立
政るもと迄ありける何時頃より右の答書と持来る云事を告げしにて政府
是より依く我艦迄ても乗めくる事と率し大砲の備を立く翌日午後第八時迄
より戦争のありとするたり又右政政府の者提督の船より乗りくる書物を送り
しとも日本語より認めありを之と翻譯するより数時刻を費やすより由て
ロロチルニールを支書翰被寄るや否やを知らざる故より此返答を明朝受
取りより来るべしと答えり

十四日 我七月朔日 午後凡八時三十分 我夜五時過 頃前ヨ薩ノ㕝ヲ贈リ書翰ノ返答ヲ乞ヒ取ルニ〳〵端船一隻来ヨリ是ニ於テ英ノ提督ヨリ薩ノ㕝ヲ贈リ書翰ノ趣意ノ甚穏ヤカナル音ヲ述ルモノニシテ是故ニ提督ハ必ス和睦ノ旅章ヲ立テ来ラン人ヲ決シテ薩人トヲ許判スルコトヲ云ヒ〇午ノ第十時 我四時頃ヨリ至リ提督ヨリ已ヨ十二日 我六月廿八日ヨリ港内ヨリ見ユル多ノ螺機蒸氣船三隻ヲ贈リ物ヲ取ント欲シテ港内ヨリ進ミ行クヲ右ノ蒸氣船ヲ果シテ猶ホ碇泊シテ居ラハ是ヨリ我船ノ砲泊處ヲ探ラントテ港内ヲ廻リ皆四十尋以上ノ深サノ㕝ニテ岸ヲ距ル事石ヤルド一ヤルドヲ我三尺計ノ處ヨリ至ラサルヲ云ヒ三十三尋ノ深サノ砲泊處ナシ是ヨリ提督ヨリ午後第三時頃我本船ヨリ還ス号令ノ旗ヲ揚ケアルギユス船ノ指示ヲ是ヲ見テ午後第七時三十分 我六時半過ヨリ至リシ頃我船ヨリ蒸氣船ヲ奪ハントテ進帆セリ

十五日 我七月二日 午後第四時二十分 我七時過ノ頃我船ヲ奪ハン為メ多ノ㕝ヲ贈リ来ルヲ報告シ多ノ〇午後第十時 我四時頃ヨリ至リ㕝ヲ贈リ来ルヲ見テ又蒸氣船ヲ奪ハントテ港内ヨリ進ミ来ルヲ以テ船ヲ綱ヲ掛ケアルギユス船ヲ薩ノ

但ハ薩ノ士官ノ内ヨリ生捕ル者又ハ
中ヲ人ヲカシラ（柏ノ義カ）ト称スル醫人ヨリ相応ニ英語ヲ通ズル者ヲ先ヅ
日本使節ニ従テ歐羅巴ヘ到リ尚今ヲ薩ノ
者又一人ヲオタン（小谷ト云義カ）ト称シ薩ノ蒸氣船隊第一等ノ船将ヲ勤メル
決シテ我ヲ欺スル事ナク又船ヲ奪ヒ取ラント
蓋シ上陸シテ戦ヲ交ルヲ寧ロ英国提督ノ手ニ属スルヲ欲スルノ情
此為人ヲ本月廿四日（我七月十一日）ノ夜半過ヨリ此為人ヲ神奈川ヨリ上陸セシメ（借ス）
ヨリ風追々烈シクシテ暴風雨ノ徴アリ其風ヲ南東ノ風ニテ午後漸ク水減少
シテ多ノ時薩ノ突出セル臺場ヨリ相図ノ大砲ヲ発放スルヲ忽チ諸臺場
ヨリ我船隊ヲ向ケ実弾或ハ破裂丸ヲ打発シケル実況ヲ我頭上ヲ近
ク飛過ギ二三ノ破裂丸ヲ我近辺ニテ破裂スル多ヲ且ツ歓ヲ白砲ノ破裂丸ヲ
以テ臺場ヲ對スル我船ヲ破砕セント欲スル様子アルヲ以テ決シテ手ヲ出サヾル
遂ニ事無ニ止ミ其風漸ク暴烈トナリ我船隊ヲ提督コルエッテ船レイスホルス船アルギ
ス船ホニ相図ヲ示シテ既ニ奪ヒ取タル蒸氣船ヲ焼テ我船ノ場處ニ来ルヲ
ト号令セシカ右ノ船々面ニ奪ヒ取ル船々ヨリ火ヲ放ツ故其船ヲ忽チ火
焔トナリ仍テ我船ヲ焼事ヲ実ニ惜ムベキ事ナレドモ此如キ場合ニ至ル
ヘキ之ヲ焼クヲ提督ノ任ナレバナリ此蒸氣船ノ價ヲ弁償ノ内ヘ入ル
ベシ○午後第十二時五十分（我九時過）ニ至テ第八号ノ蒸氣船ヨリ向ケ自在砲ヲ
以テ破裂丸ヲ放発セシカ又午後二時二十分（凡我八時ニ）我船ノ
右側ヨリ臺場ヘ向ケ実弾破裂丸ヲ放発シ又其功ヲ顕ヲ敵ヨリ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

放発そう実丸破裂丸て我船の近傍みて破裂し我船の舷具と破り切りたる檣上より〳〵臺場と望むに甚處に死そう人々丸を云り多う我等の砲発みて

砲門ニ申リシナレモ落心ナシ 敵の大砲四挺を臺上より打落しそう多き是みおく我軍烈敷の吹くみ乗しく陸より見ゆる臺場み近つきけるみ炮烟臺場を蔽くそう故み陸そう我船迄の距離

何程そうやを測り知る事能ハ丸寄丸そう多く提督を丸危難の場合ニ臨むと雖とも一向ニ怯怖の色そう気質と顕そうを然きそう事終そうきの後み至て戦争の時我傷みて戦死しそう多き勇士等の事と想ひ出して大みに之丸感傷せそう

一インチ半丸我八分許

ナインチの砲弾我甲板上ニ備そう第三の大砲口の傍みて破裂し其處み在る者七人死〳〵ロイテントセフリン并ニ外五人創と蒙きそう又外一個の破裂丸其我船の右側を打穿ち私中ニ在りし大そう端私中迄て破裂〳〵きそうと雖とも幸ニ傷害丸受そう者そうし又一個の実丸を檣上の欄を打拂ひ私将部屋の窓と打壊し遂ニ船尾ニ至て留まりそう此時敵の放発益烈〳〵我私正テナインチ乃至十八斤の大砲三十七挺ニ対せり午後第三時丸我八時半頃レイスホルス船第八ん臺場み近つき放発し〳〵臺上の砲と打落しそう多時丸

ギユス船及ひユクエッテ船進み〳〵レイスホルス船を攻めそう午後第三時三十分放発と止めそう三時四十五分丸我八テヨスリン岬み到り其處の深さを測

ろに二十五尋ばかり夜四時二十分（凡我七時過頃）臺場より
事を止むレイスホルス船及びコクエット船の人々市街の炎焼するを見る
第七時（凡我夜六時半）より至りてハホツク船と琉球船五隻焼き第八時（凡我夜五時半）に至りて薩人の鋳造所焼けあり此時降雨到りて我砲撃ち破ることあたわざるをもって之を留むる夜半より至りても市街諸造所より火炎を揚ぐるを認む

臺場上ノ石柱斜ニ違リ砲ノ為ニ砕欠セリ

十六日（即我七月三日）午後夜四時（凡我七時頃）市街并に鋳造所焼けて陸地を吹上ぶるあり夜七時より臺場の諸物件を破壊せり第十一時（凡我四時半）より和将チヨスリン指揮官ウサルセットヤルドリスミット、ハカルチーリンドセイ、チヨンホウキンスバーク、フレンシンフ等死屍を水葬せり此人々皆昨日

臺場ニ害ナシ

市街人前日追々引き移空家ナリ

延焼長サ一里ホト屋形市街ヲ去ルコト六町亀モノ災ヲ受ケズ

火薬庫虚説

鹿児島の戦争より我死しゐる者ゐるゐる市街并に鋳造所午後より至りて延焼
災焼ス午後夜三時（凡我八時半）砲を撃ち和隊を立ゐ進み再び我軍の用意を
ゐし薩人侯の家数并に市街より放発し両岸の臺場及び突出したる臺場の火薬庫
七ゐ夜三時四十五分（凡我八時半）第十一号の臺場及び此処の臺場并に突出し
破裂し其飛屑鳥嶋の臺場より到りて此処の臺場より止めを市街を防ぎ延焼し
ゐ船隊より向ゐ放発し第五時（凡我七時半）より至りゐ止めを市街を防ぎ延焼し

屋敷ノ焼ル事虚説

ゐ薩人侯の屋敷も焼けを餘ゐ逐ゐ其家屋の南方より及ゐ第五時三十分（凡我七時半過）我船七島より其処の深さ測ゐために八尋あり此島より市街の南方迫凡六里余ゐり第九時三十分（凡我夜五時半）ハルリンゲと云人を前日より創まて死

十七日我七月四日午後二時（九我八時頃）和隊皆砲を揚げ港口を進発せり此時市街猶ほ燒しうく十四里を距つる之を見る猶頗る盛なりき

死傷者の表

ユールやリユス和中死者九人手負二十二人

ペールヽ船手負七人 コリエッテ和死者二人手負四人 ロイテナントを勤る者一人

レイスホルス和手負三人 ペルシウス和死者一人手負九人

ハホツノ船死傷なし

総計死者拾二人手負十五人戦後死者一人

第八月十五日（我七月二日）戦争の時用ひたる薩广の大砲員数

○第一の壘場

三十三斤又二十四斤の大砲 ＊八挺

○第二の壘場

十八斤の大砲 ＊三挺

右第一と第二の中間は野戦砲 ＊七八挺 臼砲 四砲 臼砲 二挺 其員数未詳

○第三の壘場

臼砲 三挺

○第四の壘場

大砲の台員数未詳

○第五の壘場

八インチの大砲 二挺 三十二斤又八二十四斤の大砲 ＊九挺 野戦砲 ＊三挺

○第六の壘場

十八斤の大砲　三挺

○第七の臺場

十インチの大砲　＊二挺　三十二斤の大砲　＊五挺

○第八の臺場

十インチの大砲　＊一挺　三十二斤の大砲　＊五挺　十八斤の大砲　＊五挺　野戦砲　二挺

○第九の臺場

堅義砲車ニ載セタル十八斤の大砲　四挺

○第十の臺場

同上の砲　＊三挺

○第十一の臺場

八インチの大砲　＊三挺　三十二斤の大砲　＊四挺

○第十二の臺場

西方ニ向ケテ備ヘタル十八斤の大砲　＊三挺

東方ニ向ケテ備ヘタル十八斤乃至三十二斤の大砲十二挺

我掌遠見ニ數ヘタル大砲等の総計

大砲五十五挺　臼砲一挺　野戦砲　十三挺

右総計　六拾九挺

我掌生捕タル日本の士官両人の告ケ口ニヨレハ

臼砲　七挺　大砲十二挺

上ニ挙ケ所の六拾九挺ニ之ニ加ヘテ更ニ総計八十八挺ノ＊の符号ヲ附ケ居ル

大砲の号数を我士官等目撃して数くも多き者共なり符号多くして薩广於海軍ニ属
する日本の士官ハ言ヲ後くる負数ミ〳〵くす両人を薩广の蒸気船ニ乗ヒ
ヨルゲ船に在〳〵ヶ提督の船ニ乗移るものなり〳〵
臨時に筆写を許す会社々々の報告左の如し 一千八百六十三年第八月十六日
我文久三年癸亥七月三日

鹿児島に於く記ス

本月六日 我六月廿二日 我艦隊横濱を出帆ス其船々名英国のユールやリユス船ヘールハ船
ユクエット船ベルレウウス船レイスホルス船アルキユス船ハホツク船と称ス
砲数左の如し 本月十二日朝右の船々鹿児島の市街と隔〳〵碇泊ス鹿児島薩
州侯の居処なる故船の碇泊も那く役人数輩来〳〵英国のシユストルと応
接なし了英国の詰問書をを役人に贈らるゝ其役人右詰問書の取計方と
内ゝ相合ゝ依之役人共我等を迷惑せざらしめ先ず諸船を端
船を卸して港内測量之為に諸方に出行き久景に至りて船将シヨスリン者
士官一人兵隊と共ニ日本蒸気船の港内に碇泊〳〵あるを見るを十三日 我六月廿九日 重
役守衛の兵卒四十人を挙ひ来りて時を過さゞる是によりて客ゝ
ゝにを安穏ならざる事ハ明那ゝ如何ゝるものぞ我船隊忽ち大砲の備を
ゝゝ那ゝ警敵に向ひ争戦の用意をなし金曜日 我七月朔日 提督ハホツク船に
乗移り日本蒸気船数艘に乗人〳〵ゐ港内に進ゝ了土曜 我七月二日 の詰朝
に右の蒸気船ハ奪取ゝる午時両岸の諸台場我船に向て放発〳〵ゝるヘルシ
ウス船及ベール船を忽ち砲戦開て之に応せり然ゝを提督の船ハ空砲
〳〵浪高ゝ故ニ来〳〵碇を卸さゞ測量に時を費しけれハ砲を開く

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3
ガラス使用

之に応ずるに都合宜敷しきを以て此儀なる最後を我等の屍ハ甚不便利なるアルキエス船及びレイスホルス船を放發の用意全く備ふると忽ち右の蒸氣船三隻を取囲むことなれば午後二時頃我ハ時頃
猶も何處までも我ら必ず勝利と得くき方策をとるも此提督にあらずんハ戦時に臨て怯怖せざるて平素に沈着ならざる事ハ能さる所為なり提督ハ船隊中の貴重の船をも港より四百ヤルドの處に備へきる此船四ら三時之間動かずして居きる其時日本人を其壘場の大砲ハ弁て去りきる然れども其者共處に在る間ハ放發頻にして其放發甚善く法に合へるが故我為ニも妨けと那まる就中我が隊のユールヤリユス船ハ其弾丸に中りて大に傷害を得きる第二時三十分頃我ハ時頃
に至りて實丸弁に破裂丸雨霰の如く我船の近辺に飛来る船将ナヨスリン及び指揮官ウヰルリヒツト右同一なる破裂丸に中りて死せるぬ一丸を甲板に落て室に居合せきる士官弁に大砲掛りの者共死傷ありて手負ハ此後程なくして諸壘場多く放發を止めきる諸船ハ其處と離れてレイスホルス船の直ニ二ツの壘場の下に来りて放發しきるを見るや壘場の者を退くに至りアルギユス船弁にユクユッテ船を此レイスホルス船を助けんが為に其處に至りレイスホルス船を丸夢五時半頃我七時半頃
断くて市街及び壘場に向て放發しきる此時に処を去りコクエッヲ船を晩景ニ至る迄市街に向て断くて破裂丸を放發ニ

市街前日より追々
竹巻迄他ニ移し置
きし事ナレハ焚焼
ルノ患ナシ

所焼長サ一里
風路ニ当レ所ニ
溺サニアラス

我船如此放發をなせしが故に俄に市街ハ勿々乱れ諸物を尽く焚焼せり
ハホツク船も亦日本の大船五隻を焼き製造所をも焼けり夜ニ入て風益
烈しくして十時頃我夜四時頃
其火熾にして溺さ里余に延焼せり其火の響

火烈しくかゝりけるを其處を去ること遠からざる一小村落に諸物を焼失するの勢し
きを定て人を驚かすに至るまでなりし日曜日我七月三日の朝に至りても市街及び
製造所の火猶未だ消尽ざりき薩人の墓氣船若日本船焼失して海に流るゝ其内
一隻の墓氣船をハホツク船之を打沈るまでなり午前十時凡我四時頃に至りて天始
て晴るを以戦死したる士官を葬るまでなり午後第二時半過凡我八時過戦隊再び砲
を揚げ徐々に進行し壘場并に市街に向て破裂丸を打放しそれを壘場
より打放す砲弾の勢き甚盛那る夜に入て我船鹿児島より三里を隔て
小村落ある處を離れざる砲治ざる

火焼ル処前ノ一里之堡塞ハ薩候ノ屋形ヲ云ヒ是ハ焼タル処ヨリ六丁ヲ距レリ 虚説不可信

一千八百六十三年第八月十七日我文久三年癸亥七月四日
鹿児島港に在る英國のユールヤリユス船中に記せる
一千八百六十三年第八月十九日 文久三年癸亥七月二日 鹿児島に於て戦死したる船隊
に乗り組みたる者の死傷表

ユールヤリユス船中

第一 船將 チョスリン 三十七歳 戦死
第二 指揮官 ウヰルモット 三十歳 同上
第三 某官 ヘガルテー 二十二歳 同上
第四 同上 フレメング 二十三歳 同上
第五 同上 リンドセイ 二十二歳 同上

第六	同上	ワルレン	十九歳	同上
第七	同上	スミツト	二十二歳	同上
第八	同上	ヤルデリー	二十四歳	同上
第九	同上	チヨンポウキン	十九歳	深手を浮て死ス
第十	ボイハルチング		十七歳	同上
第十一	ロイテナントアルプゼフリン		二十二歳	淺手
第十二	某官	チヨオーレス	二十六歳	淺手
第十三	同上	ケン子ツト	二十八歳	同上
第十四	同上	チヨンビツトマン	二十歳	同上
第十五	同上	アブホツト	二十二歳	同上
第十六	同上	シキン子ル	十九歳	同上
第十七	同上	シツトセル	二十二歳	同上
第十八	セルゼントジヨルジレツト		二十三歳	同上
第十九	某官	サミユールホツクス	二十二歳	同上
第二十	同上	オラム	十九歳	同上
第二十一	同上	ニウベルリ	十九歳	同上
第二十二	庖人	ベツトコツク	四十歳	同上
第二十三	某官	ホグケツト	十九歳	同上
第二十四	無官	ホウデン	二十六歳	深手
第二十五	同上	レリー	二十七歳	同上

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3
ガラス使用

第廿五	同上	レソー	二十一歳	同上
第廿六	大砲方	セール	二十七歳	淺手
第廿七	セルゼンドユケレチール		二十四歳	同上
第廿八	某官	ナヨンスケフ	二十三歳	同上
第廿九	同上	パルト。レソト	十九歳	同上
第三十	同上	アレキサンドル	十九歳	同上
第卅一	同上 ペール船中	ミソトセル	二十二歳	同上
第卅二	工匠	アルムストロング	廿八歳	淺手
第卅三	一隊の長	フレント	四十四歳	深手
第卅四	大砲方	フアルレル	十八歳	同上
第卅五	某官	メルセル	二十六歳	淺手
第卅六	同上	ロビンソン	二十一歳	同上
第卅七	同上	ドブソン	三十三歳	同上
第卅八		ミソトセル	十六歳	同上
コクエソテ船中				
第卅九	大砲方	トマスヒン	二十七歳	戦死
第四十	某官	ゲール	二十九歳	深手ニテ死ス
第四十一	ロイテナントテンニ		二十六歳	深手
第四十二	大砲方	ハルリス	三十歳	同上
第四十三	某官	モンホルト	三十五歳	同上

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

第四十四　同上　フユロー
ペルレウス船中　二十七歳　淺手

第四十五　第二号のボイ　ヘット　十六歳　深手ニて死ス

第四十六　ロイテナント　ロット　二十二歳　淺手

第四十七　上等吉官　ギルセン　三十三歳　同上

第四十八　某官　コック　四十歳　同上

第四十九　同上　アイレン　十七歳　同上

第五十　同上　ビッス　二十九歳　同上

第五十一　桶工　ナーイト　二十五歳　同上

第五十二　某官　ヤルレスツイトルマ　二十七歳　同上

第五十三　同上キブリン　二十歳　同上

第五十四　同上カスレスゲール　三十六歳　深手
アルギユス船中

第五十五　某官　バルンス　三十一歳　淺手

第五十六　同上　ビヨンプオンテン　二十九歳　同上

第五十七　同工　ゼイムスケン子ット　二十歳　同上

第五十八　無官　ラルドチル　二十二歳　同上

第五十九　某官　チヨルデドイテー　二十歳　同上

第六十　同上　クークル　四十歳　同上
レイスホルス船中

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

第六十一　某官　二十八歳深手

第六十二　某官　二十八歳落手

第六十三　同上　十九歳同上

上に記する死傷の巨細書

上に挙ぐる第一の者ハ脳蓋を砕かれ

同第二の者ハ脳蓋の後部を打砕かれ

同第三の者ハ脳蓋及腮を砕かれ

同第四の者ハ脳膸を破られ

同第六の者ハ脳蓋を砕かる

同第七の者ハ同上

同第八の者ハ同上

同第九の者ハ胴腹を破られ

同第十の者ハ破裂丸ぢて胸膈の右部を殺かを助骨及び肺を破り腕を砕く

同第十一の者ハ破裂丸ぢて右肩に渉るを得ず其勢ぢて面部を焼き又種々の傷ぁを得る

同第十二の者ハ破裂丸の砕片ぢて落手を得又右肺を傷く

同第十三の者ハ破裂丸の砕ノ為勢ぢて面部並二両腕股火傷せり

同第十四の者ハ破裂丸の砕片ぢて面部を創を得又其火勢ぢて火傷せり

同第十五の者ハ砕片両腕に中りて創を得又左股の内部傷ノ

同第十六の者ハ火薬ぢて面部を焼く

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

同第十七の者ハ砕元ヨテ頭上に創ヲ得ル
同第十八の者ハ右腕に落チテ折ヲ得ル
同第十九の者ハ両脛膕下ヨリ脚に落チテ折ヲ得ル
同第二十の者ハ左脚に落チテ折ヲ得ル
同第廿一の者ハ弾丸の砕元ヨテ頭上并左足ニ創ヲ得ル
同第廿二の者ハ右脚に浅手ヲ得ル
同第廿三の者ハ破裂丸ヨリ面部ヲ殺ス
同第廿四の者ハ破裂丸ヨリ面部ヲ殺ス
同第廿五の者ハ破裂丸ヨリ右股及傷キ顔眼及腕ヲ火傷シテ死ス
同第廿六の者ハ砕元ヨテ胸部に落チ死ス
同第廿七の者ハ左腕に落チ死ス破裂丸の砕ケ系勢ヨテ特ニ面部ヲ火傷シテ死ス

原文廿二の者ヲ脱ス

同第廿八の者ハ砕元ヨテ左足ヲ破ル
同第廿九の者ハ破裂丸の火勢ヨリ面部ヲ焼ク
同第三十の者ハ左股に浅手ヲ得ル
同第卅一の者ハ破裂丸の砕元ヨテ足ヲ傷キ又火勢ヨリ面部ヲ傷ケリ
同第卅二の者ハ砕元ヨテ額及踝ヲ傷ク
同第卅三の者ハ砕元ヨテ面部及ヒ左股ヲ傷ク
同第卅四の者ハ砕元ヨテ臀及両足ヲ傷ク
同第卅五の者ハ砕元ヨリ踝ヲ傷ク
同第卅六の者ハ砕元ヨリ腓腸及ヒ脚ヲ傷ク
同第卅七の者ハ同上ヨリ指ヲ傷ク
同第卅八の者ハ同上ヨリ腓腸ヲ傷ク

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

同夢卅九の者ハ乾ク〳〵胴腹を破る
同夢四十の者ハ同上ゐ〳〵右股を破る
同夢四十一の者ハ実ニゐ〳〵左膝を傷る
同夢四十二の者ハ同上ゐ〳〵左脚を傷〳〵
同夢四十三の者ハ股に浅手を得る
同夢四十四の者ハ左肋を砕〳〵
同夢四十五の者ハ両脚を砕〳〵
同夢四十六の者ハ右股に浅ゐを得る
同夢四十七の者ハ破裂ク〳〵右ゐを欠傷ス
同夢四十八の者ハ砕ニ〳〵右手三ツの指を傷〳〵
同夢四十九の者ハ同上ゐ〳〵右のスケピング未詳に數点の小創を得る
同夢五十の者ハ右の脛を破る
同夢五十一の者ハ砕ニ〳〵左脛を傷〳〵
同夢五十二の者ハ同上ゐ〳〵左踝を傷〳〵
同夢五十三の者ハ同上ゐ〳〵両脛を破らる
同夢五十四の者ハ右脛を砕き右股を傷〳〵
同夢五十五の者ハ砕ニ〳〵脚を傷〳〵
同夢五十六の者ハ同上ゐ〳〵面部を傷〳〵
同夢五十七の者ハ同上ゐ〳〵脚を傷〳〵
同夢五十八の者ハ同上

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

同夢五十九の者ハ同上ニて眩ク傷く
同夢六十の者ハ同上ニて面部ヲ傷く
同夢六十一の者ハ左腋の関節を指ス
同夢六十二の者ハ右手の大指を傷く
同夢六十三の者ハ右腋に浅手を得ル

ダーロダ并其會社の開板

○八月十五日自横濱来ル

以ル書状啓上仕ル追ル秋冷ヲ相感ジ候ヘ共ますます御
佳勝ニ宇宙万国益〻御一般ニ御入津ニ成下ル御
川驛上陸同所出張ニ同僚ハ両令家ヲ始メ御家来ニ便船相頼出府ニ
各先ニ而ハ不一ニ御談ニ而ハ御用多ク取分ケ上ニ
早ク出府為被成下候ハヽ御互ニ十一日出発ニ而ハ不知相待ト内ニ先ヅ中
鹿児嶋戦争ニ而ハ御互ニ高名ニ人和ニ而ハ御和睦ニ天使
我ニ情態ハ御手ニ御ニ而ハ御出府ニ而ハ大砲ニ而ハ
を被放ニ而ハ先ニ玉薬ニ而ハ御差上ニ而ハ立派ニ戦争ニ成ル
ハヽ了ニ而ハ御ニ而ハ御ニ而ハ御ニ而ハ御ニ而ハ
船手ニ而ハ御ニ而ハ御ニ而ハ御ニ而ハ御ニ而ハ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3
ガラス使用

○白耆侯選人を招

○院議士六神奈川に滞留一方ならず運動ありとの人々行下実否如

何と云

○九月下旬より続々英船神奈川辺に一方ならず集合ありとの説多

一際ならず神奈川より所々にて加わる説多く千万人ばかりと云

方私宅を存ぜしや或は公儀より英人やとの説を聞及ばれ候哉と

云々

○風説にて不穏の密院院を招或は宇治とも云紀実否如

○

一、紙幣上位の寒冷を節季の得共ヶ為稼益々健勝為慶の事当春遠

私方一同無病消光致候間乍憚御放意可給候扨又当港ヶ外国人

掛合ヶ付御聞及ヶ方今機会ヶ付ヶ京師ヶ於ヶ幾度も相成ヶ談判

絶叢ヶ候ヶ先達ヶ申ヶ応接ヶ相成ヶ候ヶ節頻ヶ西洋中ヶ申ヶ候

ヶ彼国通商ブラントンヶ者ヶ唱ヶ家ヶ私江戸大君ヶ通商

庶ヶ云ヶ直接大変ヶ可及ヶ御ヶ聞ヶ京師大君ヶ命難黙止ヶ候ヶ断ヶ相宜ヶ

因ヶ応接ヶ相成ヶ候ヶ当港拒絶ヶ儀ハ外国第一見込ヶ場ヶ故容易ヶ償金

第出ヶ申ヶ遣ヶ入貴ヶ廿旦外国人ヶ内大抵毛ヶ者ヶ今更鎖港ヶ多ヶ

思ヶ居ヶ候ヶ谷国兼引ヶ取ヶ第ヶ候ヶ私江戸大君中ヶ在ヶ至難ヶ情態

止ヶ有恵接ヶ諸ヶ日ヶ使節外国ヶ同航ヶ上外国王ヶ亜ヶ英上ヶ和戦と

ㇾ和沢可ㇾ左候ㇾ内ハ戦争ニ至ハさるハ無之ㇾ候ハ
申ニハ不相成ㇾ速ニ近元敵ニ用向ハ不ㇾ有ㇾ之ㇾ内ニ
接候ハ何相成ㇾ共使節ㇾ罪ㇾ非ㇾ不ㇾ遣ㇾ候ハ
不ㇾ傳ㇾ商ニハ座候ㇾ彼ニミストル館ㇾ朝暮往復信用ㇾ致ㇾ者ㇾ説ニハ座ㇾ候
ㇾ今ㇾ不ㇾ御奉行堀宮内様ㇾ當港其儘ㇾ者ㇾ人心ㇾ不ㇾ合不申ㇾ候ㇾ而
新ㇾ傳承仕候

一 先達ㇾ佛人切害ㇾ一条亦来春彼國王ㇾ命ㇾ使ㇾ
是又ㇾ國ㇾ人ㇾ説ㇾ戦争ニハ相成ㇾ得ㇾ佛奴極ㇾ
ㇾ候ㇾ而ㇾ等一佛ㇾ傷ㇾ相成ㇾ得ㇾ又ㇾ國ㇾ佛ㇾ迷惑ㇾ生ㇾ却ㇾ
當港ㇾ利ㇾ様ㇾ利ㇾ候ㇾ交易ㇾ等出来ㇾ故ㇾ候ㇾ是近
ㇾ通和睦ㇾ候ㇾ國ニハ不ㇾ及ㇾ申ㇾ候ㇾ佛國ㇾ傷ㇾ利ㇾ候ハ列國近當
ㇾ候ㇾ而ㇾ佛ㇾ奴ㇾ極ㇾ候ㇾ而ㇾ等ㇾ

態勢を有分中稍〻我法を犯し掠奪の行為
ありて有国法を迫干佛了分知幸にして我戦士初
害を後に救ふ為ありて大臣ら鳴津三事通路先
も及旦品より償金を全ようてふ前条ごとく乱妨行為
及次第其後我大君幕府を當港ありて応接し相成候ほまぶ
条次一難を旨有益物政府を命を変易迫却
国法を乱り海内人心動揺せしむるてハ我争議度に及ぶ非報
以命国力をあてし一ツ仰論當港変易ごとく大君ハ免許難有我を有
有国害を生ずるてハ勿論當港変易ふ及申出化迫兵士差向るも破約を
こゝろハふ和親交士民ごとく永久ならん為ハ館舎人民を不益
女王ハ事後ごと可ありと前申談じ狩為ありて一同甲乙ありて応

接及ばず老練ありてメニラール我是ごと難易改一
ず意ありて実ありて愛情帰我ハ館舎を命職掌
を醸しハ我職掌ごと為ありて先日ごと一大変ありて
紛乱ありて是ハ後ありて所重改ハ
客ごと是迫ごとハありて打捨ありて當変易ごとありて学行ありて怨ありて頼ありて
かごとハ年数ありて変易ごとハ承知ありて
ハ我意例迫ありて縁ごと義我ごと是亦我年ありて期限ありて
基有為ありて治安新知事意持切限三ヶ年ありて狩為ありて
相成ありて最ハ年限中約ありて倫国法ありて
第ハ弥和親ありて我国ハ薩兵諸役人ハ日本料理を以ありて
ハ実門迫ありて送ハ五丁目ハやし掛ありて付ありて

人前一服三匁程ニ而度々ニ七拾匁余ニ而ハ不ト云ニストル餘ヲ用ニ供
候ハ生ノ野人四ヶ月ノ間ニ雑説ヲ伝承ニ但ハ採毫仕ノ実ニ而ニ
ハ追々ニ離別ニ而ハ後便ニ而ニ止何ニ而ニ
今右翻譯才出入ニ人外ニ而ニ急飛ヲ以テ又ニ可承向ニ而ニハ
一ニ而ニ此時情ニ而ニ
ニ而ニ再度ニ而ニ悦文ニ而ニ仁ニ日過ニ付ニ
故後出張ニ而ニ

一京地ニ而ニ神奈川ニ而ニ文ニ而ニ幸便ニ而ニ
出発ニ而ニ
ニ而ニ了承仕ル

十月九日

塚田大先生御下

○因記置白太田成宮人其氏話

○井戸谷ニ而ニ殺害ニ遭ニ候ニ而ニ私人ハ在留中ニ二ノ
殿ニ而ニ馬止ニ而ニ行逃ニ而ニ士人ニ而ニ
ニ而ニ改新ニ而ニ

○通弁ニ而ニ

浅井若狭

○右葬送ニ英人多シ小松藩士某ヲ中軍ニ列シ一行二人
○於テ八人之間ニ来ル者大半ハ心坊往来ニ於山学生新右衛門等ト
ヤヲシテ葬ル 垂井ニ到カ人ハ団子ニ在ルヲ以テ英仏ヲ不交ヲ不答ヘシ
○此殺害ニ近傍ニ彩色故ニ不審ヲ抱キヲ犯セシ彼
○ニ誤ツテ唐突ヲ云 生ヲ一件ヲ云ヘル他ヲ挙ニ及ヒ
云トモ右ノ一挙ニ
○右殺害後ハ当ニ小兵隊ヲ率テ巡行シ村落村ニ
○横浜墓場築ニ用材ヲ長ヲ
先ヲ今ヲ
○小松生ニ話薩州ヲ我後ニ八十封度以上
○依田氏話砲架等ヲ備ヘ
一ケ所ヲ膳

叔時多下ノ町ニテ斬ハ以来糸筋ヲニハ当ヲ出ヲ
第行ニ一橋ヲ上京ヲ大君ヲ引儀ヲ
一向ヲ不ヲ先ヲ
角能狂言ニタニハ国村夫ヲ仕ヲ
域ヲ
薩ヲ
ノヲヲ大要ヲ生ヲ
軍艦数艘英ヲ
まで薩ヲ
○

十万トルラル十一月四日

英政府より請求ヲ銀子ヲ薩州家嶋津淡路守家来ヨリ相渡ル上ヲ
我ホ下件ヲ受合ヒ抑當秋（本ノ）八月於生麦異國人ヲ致殺傷ルモノヲ従其場ニ
命ヒシ者ヲ探索ヲホトモ行衛不相知家屋早速ヲ月ヲ相立生死ヲ速ニ雑
計ヲ得トモ尚又精細ニ探索ヲ可補次第ヲ有之ヲ為後證如件

薩州家扱ヲ
重臣
山石下佐渡守
印

英國ヲ
弟ヲ通相違ヲ
有之ヲ後日仍テ件ヲ度ヲ下

一白ちりめん　壱反ツヽ

一白絽　壱反ヲ

ミンストル　アトミラール

一紫ちりめん　壱反ヲ

　　弘所　当紀官　通矢皮

一蜜柑　拾箱

　　那中要申ス

○上京千喜良某千栗七月廿日所条十二ノ町鐘屋太右エ門者ヲ著、陸ニ云云
道中手荷当三日柳馬場通蜘蛛薬師上ル町鐘屋太右エ門者ヲ著、陸ニ云云
当四日夜三条大橋ヲ四條大橋ヲ間ニ切於人一人有之者ヲ習五ノ処
薬ノ事ヲ往見ヲ所数ヲ所者ヲ名前等ヲ於私有ヲ文
右之者差正義ノ名ヲ為ニ富家ヲ申入金銀財宝ヲ
むさぼりヲ衆不軽依ヲ加天誅者也

○御堅言衛門人数本能寺地中東浄院ヲ引後ニ相成ヨリ系発ス
手狭ヲ以上大破ヲ修復ヲ建増ヲ又三條松申ス右ヲ旨
弓弟ハ柳馬場ヲ云ヲ移ス

○同上堅察両氏同便ヲ以送新聞五條

此者其故ハ先達テ
同藩三人ヲ要求
通大先ヲ申要服や
ら事ヲ理ヲ事ヲ押
借設し処ヲ役所
跡ニ付五人ハ同藩ヲ去
ル切捨おゐ者ヲ教
人者ハ文字誤ノ者故
ニ付如是ヲ申ス

年齢三十七八位ノ朝鮮服ニ袴
人品悪不宜

亥五月九日夜四ツ半時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一五月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一六月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一七月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一八月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一九月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十一月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十二月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十三月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十四月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十三日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十四日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十五日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十六日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十七日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十八日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月二十九日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十五月三十日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十六月一日朝四ツ時ヨリ大風雨ニテ
ス号ハ錨ヲ切テ走リ出ス
一十六月二日朝四ツ時ヨリ大風雨ニ

の兵又今日高又筥等船、大砲四百挺程之筒長州公差屆候細之筒
不申迄其節相成ト申ス右異船参之内ニ
長州ゟ乍モ打懸ケ候ニ付テハ異船ゟモ打返シ
亀山産場ゟ手前及大破軍船之内一艘、水際ゟ打抜船相沉ム
下ノ関人家土蔵ゟ多ク打込ノ家ニ右ノ内長州人数ニ
移ノ船ニ近付ト雖モ小流ニ付ノ小船ニ
異人ニ胴板、突當ノ百姓中ゟ倒シ込テ
候ニ付テ異人ニ悔シ紛
候ニ付テ異船ゟ乍モ打出シ玉勢ハ強ク日本ノ方ゟ打出ス玉
異船ゟ高ト雖モ節ハ十ニ一ツ信ノ一向害ニ不成様
ニ候ト
中山殿ハ緋縮緬ノ陣羽織大刀ヲ帯シ小袴
イガグリ頭ノ浪士体ノ者多人数附添ノ者ノ様

右中山卿長州ノ家来七十人計守護ノ為ニ
差ト乍モ
一 小倉ノ方ハ 以前ノ通ニ仕 仰出ニテソレイ事ハ
ノ由長州候ゟ乍モ通船ヲ應接ノ
潰シ一ツ見込ノ由軍艦ニ艘ヲ廻シ
ノ兵卿小倉ノ屋敷ニ焼ト申ス
阿ニ人数ニ大砲ヲ備申ス物ノ相成ニ上
ニ大砲或ハ異国ニ為土産持帰ノ様ニ実ノ
一 諸国ゟ船入交都合拾八艘滞船罷在ノ処
○長崎風聞

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

仰出ず六月廿五日迄の猶豫を願出ず其日を艘急に退帆を横様相見いる
鍋島候の家来六人勝ヶ嶋荷を纏右船へ乗込何故外船へ引放ち艘ず退
帆候ゝ哉其返答を様子ゟ聞ん人を船
右六月十五日退帆ふ波ゝてふ残の手摘ゟ長崎町人共六十四日迄ゝ
ゟ村領ゟ退ゝ様ゝ仰出ゟ由
大村丹後守長崎ゟ行ゟ仰付ゟ相違ゟ間得共意諸事同人申談ゟ間
而引続和泉ゟ下ゟ役ゟ一番ゟ船ゟ去月廿六日和泉守屋敷ゟ手負ゟ
ゟ者共ゟ一つゟ船ゟ
右ゟ長崎奉行ゟ到来ゟ書ゟ意ゟ趣ゟ
一小倉ゟ去月廿七日出ゟ状同九日大坂ゟ着ゟ由
昨廿六日辰ゟ刻頃下筋ゟ異船一艘豊前ゟ沖長刕ゟ領ゟ
嶋ゟ合図ゟ有ゟ処下ノ関ゟ受用意ゟ処右ゟ船順々ゟ登ゟ下ノ関沖ゟ
掛ゟ居所々ゟ番船共長刕ゟ船ゟも近ゟ寄ゟ異船ゟも罵ゟ
放ゟ出長刕ゟ船ゟ百放ゟ寄ゟ誠ゟ日ゟ当ゟ
格別捨ゟ有ゟ様ゟ見受ゟ間ゟ潮ゟ高ゟ上ゟ
関檀ゟ浦ゟ屋場ゟ八十ポンドゟ大筒寄ゟ
並氣船(艇カ)ゟ艘ゟ盤船ゟ廻ゟ受ゟ寄掛ふゟ船ゟ蘭船ゟ等ゟ羽異
船ゟ寄ゟ四十放計ゟ間長刕ゟ異船造ゟ
左ゟ右ゟ寄掛〇八寸計ゟ穴ゟ寄通ゟ
門ゟ寄掛スキ候右掛ゟ三本寄掛申ゟ下ノ関阿弥陀寺辺ゟ家々ゟ
裏ゟ土ゟ寄辺掛ゟ寄ゟ或ゟ土蔵ゟ寄掛又ゟ家后ゟ裏ゟ寄辺掛ゟ寄
掛亀山社ゟ廻廊表門ゟ寄掛(右カ)大廻廊ゟ家根数ゟ寄崩ゟ誠ゟ暫ゟ間ゟ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

黒煙相成候ゟ永混雑、ゟ者ハ市中ゟ者何れも立退ゟ者
申ゟ人ハ未ゟ人も有之ゟ下、実何も明家団板ゟ者ハ相こいやらしくゟ
ゟ者ハ右ゟ北國米ゟ船ゟ表ゟ井戸ゟ水ゟ
出候ゟて三度ゟ色迄ゟ三度ゟ船ゟ井戸ゟ水ゟ
付下ゟ実大混雑ゟ事ゟ下右申上ゟ
ゟ

六月九ゟ條

○ 薩藩軍艦ゟ定役ゟ
各國ゟ船ゟ事ゟ内早速定役ゟ
ゟ薄ゟ表ゟ英佛両國軍船ゟ向ゟ
ゟゟ英國ゟ軍艦七艘去月廿七日ゟ
接通ゟ為ゟ由薩藩ゟ帆船ゟ
度ゟ
英ゟ

一 去ル月中旬頃欤亜米利加高弘長ゟ下ゟ
夜ゟ高弘ゟ故、兼ゟ覚悟ゟ
艾後和蘭陀軍船ゟ艘右同ゟ
砲二度放ゟ
ゟ和蘭陀ゟ方
利加軍船三艘兼ゟ
軍艦弐艘夜ゟ
戦争ゟ者ゟ
合ゟ

六月

ゟ定役ゟ
ゟ船ゟ
ゟ船ゟ
ゟ船

今六日至八つ時ごろ極暑中なれ共萬氣二十
度程位なるや
子供合氣し有てお国ことばのとおりの大和詞の人數に男女人先ん
見送りの下女とやら三四人共に旅支度にて
ゆく大暑に道中あるく事なれとも虎門のごく手うすの
○笑艸
講釈の話家といつわれも此節ことの成と位られてはなれて行く
親子家内うち作法に其方をたゝへてつるうち細をうけ
門跡をはじめ一統の出家とも数年懇意にお招ねと自分の事行かり
一方の出方に加勢申上度方親出
当家の身る心底そとぐ千萬のうち
らん銘〻鎗一本ついて百人をそ
家出家合点のそれ出家にて百人の敵鎗をそろへやら
窺けれ○行掛らん聲こるらやられ坊さんよいいやうよい」
ある日敵の屋敷にいたれる此時は有家にお出座
こゝにいるとも見るれさる此時本艸家と聞者ジ呼よせ日利除をよの
るる聞の三人ら出日学者色こ考一人の考ハいぢん艸こし一の者
そうそう又一人ハ私の考ハい草こしこの者そうそう
仁のふ考つるかまらへてそいるこふるそうそ
○京都別條 筆工一氏所報
一七月十七日
東園中將殿紀州風浦へ巡察使被致出立 烏丸通行政見物仕先手の守衛方隨
從阿州藝州津右三藩ゟ壱弐五六人其跡ゟ東園殿烏帽子直垂にて駒馬青毛に糸

内筆すけ太刀佩き　後備紀州家々三十人隊長富田甚左衛門騎馬長
棒袋鞘巻袖なし家司並之長袴無印物羽織無印陣笠
一同日
四條侍従殿播州明石へ為巡察使出立
一今廿四日
三條橋の札場内へ晒し首一つ並び罪状札に三人と名前を書て晒し
首共見物の往来衛方随従も多く
一同日
当年十三日夜五時前
東洞院六角東へ入町の町中にて士躰の者一人通りそう町人武人二人
行と金子弐百両を奪取逃去りそう騒動
一四十日前
町人体にて駕籠を祇園へ通り途中四条橋通行の節駕の屋根
より突然と飛出し逃去る怪我をも不申
一四十日前
徳天寺殿より諸大夫方へ天誅方押込み有之
候よう巷説のごとく殺害の一説には諸大夫やられ
候哉と噂し候由房州家来より承り
右之通り

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3
ガラス使用

○土坂風説

一京都洛外壬生村ニ浪人三百人余集リ
行ヒ候ニ付テハ右ニ同二十人ヲ以テ一組ト
常安橋辺ニ一組ヲ以テ右ヲ守リ候ヘハ浪人ヲ
首ハ下ル

一右ニ付雄ヲ浪人ヲ率テ天龍橋ヲ
記シ建ツル　其文ニ
書忠報国ノ浪士ヲ似セ写シ軍用金ヲ集ル大全偽ヲ
捨置キ候ヲ以テ加賀諸侯ヨリ
当十四日ヨリ橋ヲ東ヘ改シ
其ヨリ四条辺ヘ行ヲ

の娘私通して首を取り明ケ拾ツ垂首計蒜包ニいふ事日本橋ニ
持参梟首ニスルト由

一御先手組の内のよし夜中百俵町増田氏近辺両人通りかゝり江戸ニハ
珍ラ敷百俵町と云ふがあるとこゝろもち
ニ百俵丁と云ふゆゑ大坂ニも百俵町ハなきや
人を切殺し止メをさゝず旅宿へ帰り誰を殺ゆ付切腹いたすや
と尋ル則ち腹をかき切腹致しよし右を伝ル者
越ゆゑ京都ニてハ折ゝ祈らゆる事ゆゑ百俵町ハなきや傍輩の
中ゟ尋ル所因て命ゆる所ゟ私曲ゟ桶を買寄さかり桶ニ桶
入旅宿へ引有よしを町役人ニ届ル町役人ニ届ル
呉ゝ私曲受ル事ゟ停輩両人ニて町
田ゟ二百疋持参禮ゟ事ゟよし

一上杉侯京邸ゟ出ル国元のゟゝ来ル飛脚ゟ一件仲ヲ人ニ頼ゟ
ゝ来た仲ヲ事ゟの屋根ゟ通し行ゟ不知ゟ事ゟ京都ゟ退出ル途
惑ゝゟ

一小笠原圖書頭ゟ飛脚ゟ帝俄代ゟ御免ゟ祝ゟ預ゟ来御免ゟ事ゟ南二ゟ
ゝゟ吸物ゟのよ

一姫路松丸同松平ゟ御免ゟ祝ゟ渡候ニ付年
一吉田松ゟ飛脚ゟ通行ゟ事ゟのよし
一板倉松ゟ飛脚ゟ通行ゟ事ゟのよし
一大坂御城ニ有ゟ唐銅ゟ水鉢ゟ先年ゟ松前へ
鋳ニ遣ゟ仰出ゟ事ゟ
一天保山因州松ゟ預ゟ罪ゟ事ゟ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

琉球□邊寶

當□百

右之通風中筆つかまつり候ニ付

薩摩九州逃去ら候者のよし　　戌七月大坂ニて承る

戌七月十五日京誓願寺前子三條大橋西所ニ張紙写

攘夷御変定ニ相成候ニ長州ハ勿論兵端を開候ニ付深き心配

宸襟実ニ奈何ニ在ら令ハ幕府ニ有ら狐狸ニ役人等ニ虚言誑入られ

殿様貴賤ニ不拘交易ニ諸藩ニ勅命不用交易ニ方民難渋ニ付攘夷

人ホを罪し旦百姓町人ニ至迄交易盛ニ候し　玉體四民ニも抱ら

国ニ送り金銀ニ限らず御品を持運ひ悪心言語ニ絶し候ニ付

諸藩夷艦炮撃先陣ニ彼ホニ家蔵諸道具焼拂金銀者出陣ニ軍用金ニ

地ニ向ハ　天津神　國津神ニ候ニ付恐多くも長ニ宸

下万民難渋ニ付

宸襟

奉ニ有ニ

七月

第一悪心を看出し、人条を云々差し米屋油屋
糸紙銅太物小間物荷売形を以近辺交易いたし候体を
八彩色免の条々の
右体之者有之候者、若年輩いたし候人同罪の
事」

丁子屋吟味方

○

宇内近年いたし候御触書
其方共俳諧禁制と交易致候を名目に
来候ハヽ此度無断
立入偶々出会候ハヽ
速に
可申出候

○大坂町奉行所

右之通被仰渡候ものや

江戸町奉行所

道意

○今宮門前通り物貰女二人切捨られ候一条役人御糺之上
成敗之儀

御止場古見家へ相続ニ仰付られ候

寛政七年七月廿七日

城州愛宕郡大徳寺境内
上野村
半蔵事 幸次郎

立人組

市兵衛

当村光念寺持家借住長吉蛭子屋を
書画木彫仕候通名孝光と改三拾四才之
当村町医又四郎方に病気用夜九ツ時
就右之孝光に底知有之候ハヽ速に
之上
大津追分中大谷町
店人さつ摩父元立人組屋
喜助兵衛

寛政七年七月廿七日

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

右之通 武谷少 春光 斎宮 將敦丸 男 女 十九人

先之二條殿御領分之内 城州愛宕郡上鴨村
之内 小不動堂 同断
又右宮修理職人
之内 又四郎

加誅戮之儀 又諸国浪人 正道 行政 有誠 忠治 之
加誅戮之儀 右四人 事

城州愛宕郡上鴨村
之内 小不動堂 同断
又右宮修理職人
之内 又四郎

東園殿随従数人
義州 阿州 津
紀州
右四人ニ付ス

○在京衛津氏ノ東 七月廿四日附ノ京師ノ来信

此表先般ヨリ相見ヘ候當十六日東園中将殿 紀州加田浦 四條侍從殿 播州明石浦
右為 勅使ノ為ニ有之右ノ寺衛士五六ヶ所ヲ追々
此方指ヲ以警衛相勤ル可申ニ付毎夜ヨリ五ツ半ヨリ
諸有申ス程ニ候ハヽ門ヲ 御所ノ門ヲ 右ヲ

七月廿四日

一 先刻三条殿ヨリ呼出有之別紙写之通有之右ヲ
廣下業名指ヲ以相待有勤方萬端之処何モ
真浄院普請之何や角やヽヨリ有合処ヽ右ヲ通ス
ニ而ハ難相勤ニ付今ヨリ大ノ手郭合ヲ
ニ而ハ尚重便委細可申旨昨廿一日之文領細ニ
ニ学ノ

東 建春御門内
寺番 至 肥後二十人
夜 宇和島十人
一 城州 津 十人

義当 至 杉代 十人
夜 一 柳生 十人
肥後 二十人

三番　夜　津ノ人　恐山ノ十人　来ル事ニ

別紙

一 辰刻ニ申刻　今夜交代ス

一 当分夜行羽織袴ニ

一 詰所ニ候ス　但　休所ニ差ヲル

一 武拾人ヲ三分一ニ不寝ノ番可相勤ス

一 毎夜三度ニ見廻ル

一 持ノ物ヲ交ハ追ヲ以達ス

一 交代ノ節於ノ門番所ニ　御手衛何ノ誰ト申通行ス

一 交代ノ節十人ニ従僕三人ノ番所ニ残置ス

一 矢当夜具ヲ類ニ於テ誰ト話ノ者ヲ事

一 矢当夜具ヲ持運ヲ節ハ持頭ヨリ鎗札ヲ請取ル

一 東賀茂川　西堀川　南二條　北鞍馬口

石ヲ外出張ニ及ヲ事

但シ報ヲ遠火ニより出張ノ者ヲ事

一 非常ヲ節一統火事ニ駆来ル

但建春門外北ヲ方築地際ニヲ張ヲ

一 非常ヲ節ハ陽長九門ノ馬出ヲ

一 常ヲ節ハ陽長九門ノ馬出ヲ

一 矢当夜具ヲ持運ヲ節ハ持頭ヨリ鎗札ヲ請取ル

一 交代ノ節於ノ門番所ニ　御手衛何ノ誰ト申通行ス

一 交代ノ節十人ニ従僕三人ノ番所ニ残置ス

一 毎夜三度ニ見廻ル

一 武拾人ヲ三分一ニ不寝ノ番可相勤ス

一 詰所ニ候ス　但　休所ニ差ヲル

一 当分夜行羽織袴ニ

一 辰刻ニ申刻　今夜交代ス

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

隨從之者降參從僕等將之
○七月廿三日夜京都三条大橋梟首有之候事
一 次三郎 高木郎 市之郎 長岡
三条通ヲ東洞院西ヘ入
室町通ヲ姉小路上ル
同町 同
俵屋町通ヲ夷川西ヘ入ル
蛸薬師通ヲ新町西ヘ入ル
右近来幕府私ニ交易相許シ候ニ付
蛸薬師ヨリ油等ヲ始メ外有用ノ諸品買ノ積廻シ
彼夷賊等ニ相渡シ候ニ付物價益騰貴ニ
及ビ民ノ困若不堪ニ至ルニ付テハ流
右之者共大坂長濱西國東國ヘ奸商ヲ一ニ取調ニ
致シ候ニ付テハ 大御國ノ民ニ生マレ
叡心ヲ安ンジ奉ラズ 御國恩ヲ等分ノ一ニ
上ヲ恐懼セズ夷賊ヲ助ケ幕
府ノ命ヲ軽ンジ我國ヲ疲弊
兆ヲ飢ヘシテ加誅戮令梟首者也
右之者ハ大坂長濱西國東國ヘ奸商ヲ一ニ取調ニ
族ヲ誅ス
夷賊ヲ滅シ
根ヲ絶ツ
者也
右之者ヲ金銀借用ニ付テハ一切返濟ニ及ビ
有之ヲ速ニ申付ハ一ヲ好賊ヲ幸ニ
可致ニ付
其ヲ記シ三條四條橋ヘ上ル張紙ヲ
○一 七月廿三日 三条大橋御制札場ヘ竹ニ
四 朝廷ヲ私ノ如シ
一 順
夜
合
此者前ニ
出ス
堪
積
貴シ
夷賊
共ニ
民ヲ
困
流
ス
ル
ハ
ヲ
ニ
ヲ
ヲ
ヲ

○ 皇位築造の事に就ては追々取調の上取計ふべきにつき心得のため一通り左に記す

○ 在京久保氏三郎より答申 七月廿六日

一 西 准后御門内

一番 一ノ宮 一ノ宮 一ノ宮

明後十六日巳刻馬揃之
事終て還幸之儀
小生共諸所ゟ紫宸殿永禄明御門
一 七月十六日夜大宮ゟ男女弐人下ル由申来ル
諸家ゟ祝儀来
平唐門門内
十七日 ゟ 久留米ゟ 衣
十九日 〃 〃 ゟ 大
弐荷 〃 筑前ゟ 三十人
〃 〃 水戸ゟ 十人
三十日 〃 同州ゟ 十人
ゟ廿三日迄有逗
朝倉出ゟ 三十日迄有逗 肥後ゟ 薩摩
第四ノ東門ゟ 作州津山ゟ 薩摩
肥後ゟ 松代ゟ 著 姫路 忠

諸ゟ献上長持名
作州 海老原極人
中井 鉄之助
河人ゟ也
相国寺塔中富春軒 津
寺町通浄華院 肥後
ゟ 吉村長兵衛
小 坂吉洋之允
八
妙心寺塔中玉鳳院 宇和島
ゟ 著名
久布院
姫路 忠
相国寺塔中 宇和島
養光院 ゟ 著
小川敬四郎
東同寺塔中 福山
薬師院ゟ 中津
仏長
宮ゟ 著
建寿ゟ請ル
諸藩ゟ御士姓名
著名
河人ゟ 松田順之助
大平安衛 小幡勝馬
松平筑前守 楠田郡兵衛
ゟ 著
加藤雄馬
吉村弥一郎

伊藤博文　大石内蔵之助　河瀬直三郎
福地源一郎　澤田善次郎
中井弘蔵　戸田欽堂
寺島宗則　河瀬八十八
今泉雄作　山田新吾
屋川半左衛門　高橋立吉
小坂　大八　清田高吉
加屋次郎　洋太郎
出田仙甫　惠　九藏
窪田任一郎　宇都宮三郎
中島宗平　河瀬真孝
伊澤野雨龍　澤　平馬
多武忠八　多胡保業藏
澤村修吉　西嶋亀之助
富永等吉　森田大藏
中島武兵衛

○一當番之者ゟ左之通申談事左之通

一　四筋目中更書用之事　但両天ゟ拿下候節
一　兵當日晩ゟ翌日晩迄之内用事有之節
一　從僕ゟ三人許之事　但不残供揃
一　火事其外ゟ用捨之事　但兵當ゟ断ゟ
　　之ゟ用捨之儀ニ候

著服　羽織袴　但雨天ニ候ハヽ
　　雨用之合羽着用之事

錠前番板股引竹笠　雨天ニ候ハヽ
　　合羽着用之事　相田

一　七月六日初而當番ニ相當候　日ゟ
　　令人樂舍ゟ庭出別座敷ニ而朝食ヲ喫ス

○先々年御尋ニ付書状差上候通
　　真田伝左衛門
　　玉川一学

○在両堅密手簡物
（京）

扨又此日勤番ヨリ仰渡ノ一条玉川氏ヨリ被申越ノ趣ヲ
（七月廿六日）
以昨日三条橋ヨリ飛脚ヲ以申越ノ通ニ御座候
（殊）
申上ノ通リ右一条旦一日寄書頂戴仕候ニ付

何廉兩辺委細ノ申上ハ何レ海便ニ申上ル筈ニ候間
今茲ハ行方ノ旨ノミ申上置候而退帰ニ而節具ニ檍ヲ清和御門抔迄
ヲ見送ラントテ去ル廿日ノ後計ニ具足ヲ着シ初発ノ由ニ而先ヲ急ギ候
ハヽ事ヲ缺ク
とりまぎれ
七月廿六日ノ三條殿御用人ニ宛タル近日達ノ和
明後廿八日ノ刻馬揃　御覧ノ為御勢ヲ御派當ニ付一ノ砦
陣出役事
衣紋　陽春真宝
　　羽倉小将
　　陣営法度ノ事

○七月廿八日雨天ノ為延引
○一柏井明治三年五月
以下ノ紙御警衛ノ為ニ
附ケ置候馬揃不行届雨ニ
延引ノ後迄ノ
作事ハ出来ノ分
ノミ
七月ノ分

刻限ヲ延ル事集徒ノ気風
ノ有ルヲ以ノ事ニ候間
雨天ニ候ハヽ順延ニ九日ニ
陽ヲ待ノ
ノ事

○在京玉川氏手柬

昨今雨天相續朝夕ハ冷氣過ノ様ニ相覚申候　都下
無事ニ候ハヽ廿六日三條殿ヨリ別紙ノ通リ行幸ノ
筈ニ候間　御守衛當番ノ刑左ノ通リ出役
致ス間敷候　後ノ三條殿ヨリ罷出ル筈ニ候間　其
節ハ新調ノ拝領被　仰付候間右様ニ相心得
罷出ノ筈ニ候間右通無間ニ合ノ様　朝詰等
罷出ノ筈ニ被　仰付候間右ノ段隊長ニ而申上候
様ニ隊長ヨリ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

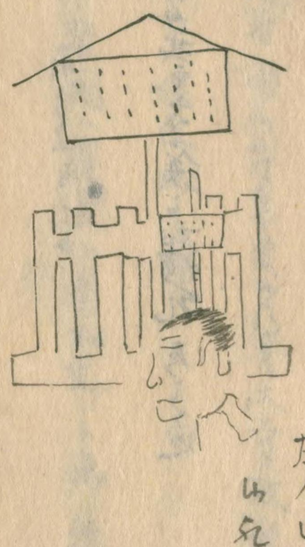
直宮下衣服を始ヶ條ノ手和を以テ御会仕ト中
小ヶ刀差太刀ホル持合ノ、相用ル用意ニハ、ノ
ホ及ビ一伍長以下ハ羽織小袴ニテ各何衣服ニテモ可
苦カラス常ニ通ル申渕ト夫ル清和院ノ門内ノ学倫院ト学向
カヘニ相廻ル如清那并校
校本校ノ詰合者ニ直ニ明日ニテ 御覧ホル
方席順ニ立列座列ニ割振ホル以後圖面ノ通ニ
圖ニ通南側座列ニ上座ニ相成ル南縁ノ導衛方休息所ニ
ニ通長ニ名札ヲ以テ陸軍士官ハ陸軍体
ニ隊長ニ名札ヲ以テ陸軍士官ハ陸軍体
御覧ホル隊長初各ニ指揮ニ一ノ隊ヲ外校
一去ル日三條校ヲ建春門内ヘ導ク所ノ守衛無事校 作州校 津校 姫路校

宇都宮校ヨリ校名校ヘ 都合ノ人数交代勤番ニ 仰付ノ一件ニ
一昨廿五日仕出シ七日限ニテ申上ル筈ニ候処 一同信ニハ
事ニ候間申候ニ当番割ニハ変ハ無之ニテ
事ニ候間申候ニ追テ夜計ニテ方ニハ
為ニ四ニ諸出来ニテ校ヘハ

○在京玉一氏手東牧

七月廿六日 一学

三條橋ノ刻札ニ又一件ニ有之ニテ鈴木
ヲ以テ

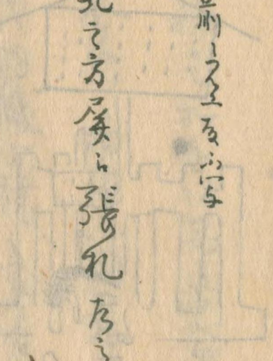


左ノビヨリ頬ヘ掛ケ刀疵ヲ処 日前ノ切
ハ名ニハ波ガーテ有ニ

右板札

一 七月廿六日朝 本能寺表門ヨリ北ノ方ニ張札有ル通

歎願



昌近於横濱表呉服糸蚕交易仕候ノ儀深ク恐入奉存候
御運上ノ儀御免辞仕候事ニ候ヲ存ジ
誠ニ恐惶至極ニ奉申訳ノ仕様モ無之候ヘ共後悔及血涙ニ候ヘ共仕方無之
是迄交易ノ心組ニ付諸品ヲ以金銀ニ引換不申候ヘ共
ノ儀ニ候ヘ共仰ノ通リ万一ニ減少ノ程ニ而申越ノ深雑方仕合ニ候ヘ共

八月三日隊長六字出ろう家兵一行、
宝二百足浜長二百延ル

日ヲ御門ヲ突カ、ヲ望、塀カハキ兵人番ヲ伶人楽屋ヲ相勤ト花ノ旧ノ御門ト南門ヲノ号ヲ御宿ヲ東南ヲ角ヲ

一先月晦日乃雨中會津屋ヲ馬揉　天覧供奉節ハ小生南蛮ヲテ御寺御ヲ不
発出本月五日又ヽ　天覧天気次第ニ依テ御寺御ハ日葉
地ヲ東　天覧系ハ御二階作ヲ小生ヲ居ト所ハ
摂家清華諸堂上ヲ外国人三間程北之故ヲ系リ
主上ヲ御装束ヲ覚ヽ相見仕摂家ヲ容顔ヲ
遠向三間半程南摂家ヲ系ヽ日門固ヲ諸候上杉両家（四十三四歳 二十六七ヲ 池田 三五
阿州十八之世子床机ヲ居系ヒヲ砂ヲ敷ノ御ノ外ヲ栄番ヲ
甲冑ハ系ヲ得ヲ鉄砲ヲ手槍ヲ備系ハ夜深ヲ一ノ番ヲ有ヲ延引
一長州ヲ兵頼ヲ実ニ行ヲ哉ヲ、ヲ、土州ヲ長刀中ヲ勢四人係ヲ柄一尺六
寸七分ヲ信ヲ柄ヲ黒天鵞絨ヲ化皮ヲ鞘ヲ猩々緋ヲ色ノ杯又ヲ革ヲ巻シ一尺
二寸位ヲ毛ヲ附ノ皮ヲ丸中着ヲ後指物ヲ附ケ雨ヲ徘徊ヲ御ヲ多シ

一御当八日真浄院ヽ相移申ト

（在京 秋津氏所労図附記

ヲ八月五日ヲ御門前ヲ諸藩図注

會津兵人数千六七百人程 西甲冑之
火縄筒 雷火筒 弓 鳥銃 弓 三千丈程
因州兵人数千人程 手服 君公ヲ鈴ヲ七八位
火縄筒 雷火筒 弓 鳥銃 弓 三千丈程
なり七八百人程 手服 君公十七八位
火縄筒 槍 鳥十ヲ延 拳銃ヲ延 弩銃九流

米沢六七万人祖子暇君公子十五六位
雷火流星疾　三千余流二十挺　君公自号人々
備茶六七百人程　君公大四五位
右之夜ニ入砲数不知矣

一祝ひとして毎年祝之ニ

○一千石以上日記
八月九日第之伺ニ相登ル　翌十日長袴用意登城之筈
又昔病弱之節代参ニて往来日数三十日位之筈ニ候

○風諫状書抜　七月中西國様ゟ為ニ差出ス由

一天朝ゟ當春中頃ニ将軍家ニ京都ニ参遊ハさる様ニ永く将軍を京師ニ止メ人質同然
改さんとの事ニ有之ニ付将軍家ニ於ハ幼年之ニ付当時ニ容易ニ参内ハ出来ぬ筈ニ候
并侍従等之ニ者差出ニ而不義ニ陥ニ而ハ不相成ニ付ニ而ハ参内ハ出来ぬ筈ニ候
以武ニ而ハ如何ニ相成ニ候ニ付ニ而ハ天下動乱之基ニ付ニ而ハ
以ニ而ハ向ニ而ハ飛ニ而ハ御出ニ而ハ右ニ而ハ情実ニ而ハ不参ニ而ハ
以砲ニ而ハ大ニ而ハ小ニ而ハ兵ニ而ハ暮り金鼓ニ而ハ鳴し京師へ押入次第ニ而ハ
丸ニ而ハ打ニ而ハ将軍家ニ而ハ参内ニ而ハ帰ニ而ハ
東下ニ而ハ英夷拒絶ニ付ニ而ハ乃蒙ニ而ハ拓地ニ而ハ
をも不顧ニ而ハ断然ニ而ハ償金ニ而ハ差ニ而ハ又已ニ而ハ身ニ而ハ
当兵ニ而ハ引連軍艦ニ而ハ京師ニ而ハ迎ニ而ハ先ニ而ハ小家ニ而ハ

ホテ家ヲ焚ク或ハ実ノ言語道断不届ノ至ニ付以下ノ通リ厳科ニ処セラルベキ旨ヲ布告シ且ツ其ノ支体ヲ截リ或ハ両耳ヲ削ギ或ハ鼻ヲ削ギ或ハ両類ヲ狗裂キ各自ノ罪ノ軽重ニ応ジテ其ノ逃ルヲ許サヾルヲ以テ其ノ方ヲ定メ又ハ偽言ヲ以テ人ヲ欺キ或ハ人ヲ脅シテ己ノ用ヲ弁ジ或ハ人ノ妻ノ力ヲ借リ人ノ長刀ヲ借リ其ノ長刀ヲ以テ人ヲ殺シ又ハ人ヲ殺シテ其ノ首ヲ取リ或ハ人ヲ殺シテ其ノ肉ヲ食ヒ或ハ人ヲ殺シテ其ノ肝ヲ食ヒ或ハ人ヲ殺シテ其ノ血ヲ飲ムヲ以テ

逐一相認ずるに又唯美臣手隠手微の區別あるを已て私
隠せざる処あれども是亦天下の政務ハ公道と
して仕給ふ人、知れるところ和らかなる御所置こそ願はし
き

亜墨利加合衆國ミニストル
ユキセルレンシー
ワヘルトヲブラーインテント

貴國第四月十六日附第四十二号にて書翰を以瑞西國公使節を越セーるヨリ條約
取結ふんがため宇内の各論ありと報知セりと雖とも我國當今之事
情実以容易なるべき場合にあらざる節少なからざる柄なるまで
新なる外の国と條約を定めん事素より難しとする所なり瑞西白
耳義の両國ニ於ても既に約せる次第なりて我先職安藤對馬守より貴國
先任上使ハルリス(ヘ)托(ト)し奥地理國ホ(ヲ)條約取結ふ(ハン)お新(ニ)たに右両國
之(その)お除きー祈るのみならず當今て勢ニ乗じ条約確定せんとする易うからず
思ふ所存有さまにて其許請求ニ意ニ従ハざる時ハ我快とせざる所にして
敢て條約を取結ふ(ハン)ニ於ては固より拝具謹言

文久三亥年七月十七日

○

和蘭（コンシュルゼネラールヨキセルレンシール）トデガラースフ、ハンホルスブルー

貴國第四十九号八月五日附の書翰落手、許可の事を神奈川奉行差止め、義を以て申立て援節諾せり、毛利家の藩士木戸許、對し暴行の振舞有りと申入まつりを聞く方今

木下幸次郎　花押
小野和泉守
板倉周防守
井上河内守
有馬遠江守

長門の事なり、故特に内密を以て其筋のまつりごとに限りそ浪人ら都下に満ち居りて外國人を警せんと謀るものありとも難ずるに足らず、親の意を以て差止めなば将其許都下に在留せらるゝ英職掌の當然なるの事は予も於ても固より承知せざるにあらず、況や英許於てをや、私事なの過ぐる拙念の節も申せるごとく我が国内の素景況（京カ）ざまざまにして方今使官館護衛等多く能く其許居らるゝいとも失火ありて節を消防等家具運輸之人夫不足に及ぶといへども夫に有志数十置且申越さる通り同所を西隣と掛け離れ居まで多分火難を免るゝ筈をも列一風ホ之節を人力の及ざるより延焼の必無を期しかたく就ては第一焼失之禍有之とも必ず難徒所為とは雑居定其辺を心得度い右回答如此ニ拝具謹言

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

文久三亥年七月十九日

五人連署

亞墨利加 ミニストル レシデント
ヲキセルレンシー
ワベルトエワツテーイント

貴國第七月廿九日附第八十七号之書翰落手神奈川港運上所ニおゐて關を輸出を禁ヤ
トの儀ニ付同所奉行ヨリ貴國ニ差出セル書翰之写を添ヘ被申越委
細領承セリ一件ニ關と種紙との高貴を邦内従来之定格ニ而濫ニ輸出およ
ふとされ若支不申候ニ而ハ敢を輸出を禁するとハ不相當ニ付返ス敢を輸出を禁するとハ不相當ニ付返ス
さゝまとも國内要用之餘りニ而ハさるもの之外ハ各開港場ニ差送さる可ニ付出處
不正ニ而ハ有まじを運上所ニおゐて一應取糺ニ事ハ仏蘭西
人ニ許セらを貴國民禁セるとの所謂ハこのるゆへ且右關を神奈川奉
行ヨリ貴國正士ニ可相贈との文ニ見なして為買入度旨同人申立ゐる
ニより多量事ニ厚意を以可差贈積申入ニ而ハ賂不正之筋とハ事
かろうの申問其旨ニ諒察セ候度い右答書如斯ニ拜具謹言

五人連署

文久三亥年七月十九日

○文久三年七月

幕府ヨリ付松浦正一郎建白

外夷拒絶之儀西洋萬國ヲ引請戰闘ニ及候得ハ不相成ハ勿論海東獨立之
皇國一旦戰爭相開ケ日ニ幕攻掠ヲ受ルハ
天孫ヲ御奥屋敷ニ後閑係ハ不容易一大事件ニ候ハ仮令
勅命ニ出ル
皇國ヲ存亡ニ及候ハ幕府ヲ御存亡ニ候ハ
急務開國ヲ御制度ニ御治定被遊候ハ
勅使東下ニ未攘夷ノ義不相立ハ
朝廷ヲ
付自
御上京ヲ遊ハ
幕府ヲ御存亡ニ候ハ

ハ、前日之御請之全ク知行之筈一語ハ請之事故且天下之勢ハ及ビ說ニ據夷之変ニ乗シ
テ此機ニ後根ヲ処ン今更ハ反覆ヲ恣ニ称シテ天下之說論ヲ示ス遊ハ相當ノ御職意
内外ヲ徹底不行上ヨリ
主上ヲ逆鱗ヲ生シ下ヲ草茨ヲ過激輩ヲ不遜ヲ増シ帝御武
威不相立而已ナラス外夷益傲慢ヲ生シ内諸侯弥序堂ヲ詭譎ヲ賤シミ四分五裂
ヲ可相成ハ眼前ニ落ン一語條約為取替使節ホ近御造シ相成ハ各國ヨリ鎖國ヲ
御說相成候義ヲ年此上御六ケ敷筋ヲ渠ニ於テ大ナル辞柄有ヲ加ルヲ我微弱
ヲ渥侮ニ已ヲ武力ヲ負ヒ候後ニ有横濱一港ヲ閉鎖ヲ以テモ說判容易ニ可行届見据有之
而各ヲ必兵力ヲ以迫了可申候得共結句戰争ヲ覚悟ヲ極ハ止ヲ得相成ハ止ヲ渠ヨリ暴發ヲ及
此度鎖港被遊下候情実ヲ委シ懇々御說得相成候ハ、曲直判然恥ヲ憂ル義ヲ有候横濱鎖港ハ說判ハ容易ニ
日ハ請相成ハ據夷ヲ強先ツ御施ヲ相成候ハ、ハ其時切迫ニ臨ヲ又ヲ開國ヲ御說
被遊筋ヲ其條理大ニ實ヲ以テ有候ハ、ハ說判不行届ヲ上ヲ三港ヲ扨置環
海ヲ御國開ノ大歟ヲ引續ノ被遊ヲ勿論ニ候得ヲ正義ヲ踏ヲ破ラレ
御恥ヲ累ヲ及ヒ且全ク開國ハ制度ヲ相成義ニ候ハ、ハ形勢ヲ以熟視仕ル生
変ヲ如キ事件ヲ不絶歟ニ
御国内沸乱ヲ止時運ヲ
幕府有之ヲ如ク諸藩割據ノ勢ヲ
御國内如斯ヲ必然ヲ有之ニ付而ハ容易外夷ニ
対シ前文ノ御趣意ヲ相成候ハ、及ヒ
内乱ヲ
朝廷ヲ対シ申訳相立ヒ
候ヲ有之ニ付右ヲ時勢ヲ不私候不快引込中ヲ見
込不申上今更因循ヲ候見込候ハ、ハ
国一ノ相成
ル様ニ不顧憚奉申上候右一條ヲ此程中ヨリ諸有司建議仕ル義ヲ
異論ヲ可有ヲ候得ヲ御省ヲ存込不申ニ心底ヲ激烈ヲ論シ涉ル候候ヲ有
篤ヲ御熟考ヲ上何ヲ卒ニ御一定ヲ遊ハ、ハ鬼神ヲ避

る後ろ苓仔ヽ帰申ゐ御施ヒ相成候ハヽ活路ヌ一の着ひ出ろて是迄ヽ如き渇時ヒ御訪還ヒヽ没ゐ御挽回有ヽ間ヌ事ヽ悚慨怨歎ヽ不堪次第ヽ座候仍ゐヽ一語ヽ侍機ヽ攘夷ヽ両字御奉戴ゐ御國威御更張相成ハ格別ヒ御奮発有ヽ公ゐ様還御ヽ上直ヽ御歸令御下相成ヽてハ自今ヽ勢容早可救ヽ術ヒ条ヽ後ヒヌ存ゐ間ヽ此ヽ老中方若年寄衆御上京有ヽてヽ右ヽ席御専務ヽ被仰ハ意味含厚ヽ作上何卒還御ヽ御手續ヽ可相成ヽ所ヒ方今ヽ急務ヒヌ存ゐ已上

亥七月

松浦正一郎

武負ヽ桜李書今度一橋公御歸府被遊候ヽ未越ヽ何卒還御之御手續ヽ文ヒ掛ハ蓋五月中下澣所認旬也一橋公飯府ハ五月九日　大樹公東歸　御暇ハ六月三日而十六日　還御也　然ハ七月ハ五月ヽ誤ゐヽ

○松平春嶽所存書

一越前家一定之論ヒ申ヽ方今洋夷ヽ形勢古ヽヒ夷ゐ大ヽ開ケ萬國通信ヒ結ふの時節吾　日本の孤立ヒ勢ヒ天道の變遷ヒ考ゐ理ヒ不知信ヒ守内ヒ失ひ皇國の恥辱是より大ひヽるハヽヒ一是ヒ以鎖國攘夷の理没ヽ所無ヽ旦彼ヽ強大の五大洲縦令　皇國一般攘夷一致ヒ至ヽヒ敢ヽ當形ヒ見ゐヽ敗北大敵ヒ為ヽ況　皇國いよゝ一致の見込ヒ条ヽ既ヽ和解ヽ姿ヒ有ヽ其上一旦通信セ一五ヶ國ヒ故ふく攘夷ヒ至ヽて条第一ヽ信義難相立唯今攘夷ヽ申ハ所謂彼ヒ知ゐヽ己ヒ知ゐヽの謂ヽて　皇國滅亡ヽ及ふヒ必定航海ヒ世界變遷の理ヒ順ふ訳ヽて　皇國ヒ自ら富ふ国ヒヽ一旦當時盛んヽ攘夷鎖國ヒ唱ふハ環海ヒ守ゐ計而已ヽて御國威御更張の振令訣ゐ条ヽ旦又　京都ヽて只管攘夷　御唱ヒ

相成り得ず弥御勝等御計略を以て事欲を相閣候就而は是非航海を以て難相成全躰西洋邪宗と唱へ候る古の切支丹と云ふ而已ならず随分取用候而も繋害を可生宗旨ゆえ不承知一是等制度之立方も寄る事まて此方人民彼等と押し深交候ハヽ早晩此方の改道彼を及ぼさゝるよふの義は是迄のごし就ては勘考の上所置を以て事を為之故ゆ越来一定之論る申ハ是迄幕吏航海之説と大ゆ異ふ彼五ヶ國を立並て同く大軍艦数千艘齊く環海出没(没)童々墓場を設け此方より熾ゆ航海して有用小易く或ハ亜米利加の器物を英國持越し佛蘭西ゟ産物を以て魯西亜ゟ持渡ゟ彼等ゟ一入枝出て交易をゝる至る時々自然ゆ海内富強の國ゟ至るべし既ゟ攻ゟ勢ひを以ゟ環海を固めひとしく御國威益至強しゆ永く通信をゝる至る時々萬世強(繈)る患なるべし萬一彼より信を破るハ曲彼ゟ名を忽ち航海を以て吾國を亡滅をゝるいたるべし然ハ五ヶ國一時ゟ敵國とゝる事ゆゝる至る時々一國或ハ二國さへ打ハ小敵なまじ破るゟ安ゝるべし思ふ斯る大體ゟ御用を弁じまじだ

只管洋夷醜(醜)虜ゟ攘夷ハゝゟ唱へ禽獣のごとく夜(ゟ)開く仁政を施(施)ハ如今萬國通信の為躰京都の論のごとくなるまじ文王孔子素ゟ天地の間れんゟ相違ゟて若京都の論ゟ実ゟ夷狄と唱ふ是を攘ふも可なれん欤且又幕府洋夷通信之義を誤ゟ恐怖之心ゟ引起ゟ大ゟ其事ゟ誤ゟゟり別ゟ皇國ゟ御為ゟ為ゟ鎖航有ゟ理を知らず故ゟかゝる時節ゟも至ゟ候ゟり航ゟ攘ゟ恐天朝ゟ恐ゟ幕府の所置ゟ無ゟる天理を知ゟず故ゟ恐ゟ可申欤苟も其恐を

知ラス不諫ヲ臣タルノ罪ト忠ヲ盡ス所以ニ非ス斯申ソトテ越前家ヲ於テモ
一定ノ論ヲ決シテ翻サヽル　皇國永久ノ謀ヲ存付候事ヲ得ヲ是非
ヲ此説ヲ押立臣子ノ道ヲ守ラサルヘカラス　天朝幕府共御失徳ヲ奉諫論
若シ於不被容ハ斃ヲ止ヲ是一國ノ衆論ヲ以テ又敢テ此説ヲ以テ他藩
ヲ説ニ及ヒ一國ノ力ヲ以テ相成ケ様ニ周旋イタシ候ハヽ多分一國自差此説ノ行ワレ候様ニ相成
候得ヲ素ヨリ　皇國ノ御擾夷所願ヲ有ヲ右ヲ定論ニ既ニ春嶽上京中ヨリ
無度建白ヲ相成候得ヲ御衆国ヲ故ヲ此事ヲ右ヲ説ニ及行ヲ移ヲ一國必死ヲ憂候
ヲテ止洛ノ筈ニ治定ノ処　將軍家御帰府ニ付ヲハ其節早ヲ建白不申ヲテ
叡慮貫徹ノ為ニ當春参内ノ筈ニ御気色ヲ悪ヲ御取消ニ相成不果又春嶽上京ヲ未相知候ニ付今
日ノ勢ヲ今日ノ論ヲ定ヲ上京自當ヲ一藩貫徹ノ為ニ在京ニ止ルヲ一ニ付ヲ京師近ヲ浪士
ニ多有ヲ之ヲ　皇國ノ為ヲ右ヲ議論ニ及ノヤ

此書日月各之
至七月末而

○一橋中納言殿再度辞職ハ勤頻ノ書

頓首再拝敬白

殿下不知慶喜ヲ不肖過ヲ可用者ヲ被　思召天下ヲ重任後見職ヲ為
命日夜自有仕ヲ而不堪恐惶ト抑當今攘夷不ノ行形勢ヲ熟知仕ヲヲ
天機一發倫言如汗閉鎖之利害今亦不可再陣武臣ヲ職掌ヲヲ
死ヲ期ヲ而及東帰ノ處奸説紛々意外ヲ大擾ヲ生ヲ万ヲ不可成形
勢ヲ有去五月中當職御免奉願ヲ処出格之
天恩ヲ以辞職御差止ノ被　仰攘夷成功ノ仕ラ謹而ヲ畏ト恐入ヲ
十三日御請申上ヲ通攘夷期限有ヲヲ一策ヲ以ヲ之私見込通ヲ被
仰出ヲ、御請申上出勤ノ仕ヲ旨ヲ申上ヲ処此程薩長二藩ヲ満之処黒ヲ付
御国体大ヲ関係仕ヲ大事件出来億ノ觀仕ヲ（恐有假文）ヲ罰引中ヲ身恐入ヲ

有司近相議ス事ニ至リ如意見ヲ行不申ケ候ヘ仮令攘夷之
期限ヲ見込通ラ 仰出ラレ候迄 仰出ラレ候ヲ遵奉仕候ハヽ洋夷ヲ方一戦争仕ヲ必敗ヲ期ス歟軍仕ノ時ヲ
辱ヲ止ヲ等ノ浅智微力ヲ私ヲ以行来中々忠勤可仕途見込ヲ言不被行謀ラ行ヲ後ヒ此
職ニ在ヲ罪ヲ職ヲ罪天人ヲ責一身ニ迫ヲ故断然辞職ヲ願ヲ候ヘ
洋夷ヲ紀ヲ陳伏ヲ御ヲ察ヲ願ヲ誠惶誠恐頓首ヽヽ

慶永

○文久三癸亥年 川因州侯 天子ヲ建言
項目条 内之節ヲ御方会議中就 御親征之
ヲヽヲ蒙謀身ヽ餘ノ辱次第ヽヽ抑 皇國古昔 御
御武威外國迫被為振ヽ事史中歴々ヲ相見ヽ是則天下之大権所以攸ヲ 皇室 皇統
之万億ヲ所以也然ル當節形勢切迫ヲヲ仁申有ル公卿有幕府有列藩若夷賊近
畿及辺境ヲ侵ス事ヲヲラヲ幕府拒絶之術ヲ盡ヲヲ勿論之事ヲ左ヲ公卿英武之
人諸藩有将略輩ヽ 詔有之盛戦之術ヲ盡ヲヲ免狡敗衂多キ時ヲ親王家ヲ任将師
其上ラ 御親征ヲ相成ヽ手続ヲ相考ヽ右 御親征之ヲ評議其論ヲ(本ヽ)迚不當機ヲヽ夫レ
王言如綸一度出不可反若 御見留ヲ不ヽ為 在仮染ヽ被 仰出 詔勅屋位ヲ失
ふ時ヲ下之人上ヲ疑ヒ遂ヲ 皇權輕成行ヲ申ヽ匹夫之言且唐虞之時雖然輕々敷用
下ヲ言而誤國是事其類不少ヽ伏ル願ク〻何事ヲ鎮重ヽヽ所置名実相叶ヒ 皇權相重キ時ヲ

之言下恐有脱字

兼之所奉仰之　王室天下之億兆誰有不皈者哉尤い、
御親征を以上難不可存枕会ニ（有）（本ノ下、）
ニ〻却而非損　皇國威而已此事天下ニ流布候其実事ハ〻ニ畢竟天下億兆之心を以
失ひ奉ん遊ら奉存ん奉存ん候ハ去　御親征ハ遊度程の　叡慮を始終　宸襟ニ姿畫
被遊度仮令夷狄大挙乱入候とも　宸襟其為ニ不被
趣ハ其時社　孰輩進む有て退く事ハ〻ニ而ハ在度夫誰徳始潜而後ニ其伸ハ事廣
大ニ而ハ兼ニ右之　御英気ハ養ハしく遊置度ハ以ニ誠ニ不可捨天下不重　御威徳ニ且
大樹已ニ皈城相成ハ儀於関東ニ攘夷之計策追ニ可相定ハ〻ニ而ハ御ニ栄長門ニ奉　叡慮下向ハ〻ニ右之
ハ請ハ有之ハ〻ニ其時又建言仕ハ〻ニ而ハ一向ハ座ハ得共関東之儀ニ先其後ニ而ハ差置中國西國ニ
緊要之諸港ハ観察使を被遣攘夷ニ備ハ度相ニ
備之族有之ハ〻、観察使　奏聞速ニ其罪を糺ニ相成ハ〻、萬　御親征ハ
朝威益ニ盛ニ相成一の申ハ右観察使を以下ハ〻ニ誠意を京ニ勿論四方之諸侯ハ〻ニ布
告相成ハ〻ニ而ハ其後右ニ手続ニ相成ハ〻、過日も了止ハ〻ニ通ニ
上ニ御不置鄭重ニ而ハ在ハ〻、ニ実功相立ニ而ハ数年ニ存ハ〻ニ而ハ異ニも何事ニ不寄ニ而ハ　朝廷を謹ニ而ハ一つニ而ハ免角
ニ而ハ発行之儀ニ而ハ必ニ而ハ仕遂ニ相成ハ〻ニ而ハ不耐仰願ハ〻ニ誠恐誠惶頓首ニ謹言

○文久三癸亥年七月上　枚弾正大弼家老豊國家ニ内建白

乍恐御内々奉言上ハ〻ニ覚

攘夷之儀ニ而ハ主従一同最初ニ而ハ没心仕ハ〻ニ而ハ修軍實練兵衆ハ〻ニ而ハ後迚先以来不急ハ〻ニ得
共不知彼ニ而ハ不可征ハ〻ニ而ハ嘉永度以来家学之外洋夷一般之器械用兵之法傍ニ而ハ為
相学候ニ而ハ処醜夷往々貿易ニ相狎候ニ而ハ後ニ而ハ恐　皇國遂ニ而ハ疲弊之基ニ而ハ歎
奉存ハ〻ニ而ハ前説ニ昨年秋攘夷御切之後　幕府ハ〻ニ而ハ建言仕ハ〻ニ節不得止貿易ニ而ハ許ハ
ニ而ハ長崎箱館ニ而ハ限ハ〻ニ而ハ得ニ而ハ即　朝議ニ而ハ可相成哉ニ而ハ相心得罷在ハ〻ニ而ハ
不図先達而厳下ニ而ハ攘夷之後ハ〻ニ而ハ君ハ〻ニ而ハ臣ハ〻ニ而ハ父ハ〻ニ而ハ子ハ〻ニ而ハ兄ハ〻ニ而ハ弟ハ〻ニ而ハ夫ハ〻ニ而ハ妻ハ〻ニ而ハ友ハ〻ニ而ハ交ハ〻ニ而ハ答ハ〻ニ而ハ不ニ而ハ了上自然因循ニ而ハ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

一の外　思召深く〻奉悼入り前件申上り通り已く草
循之心底を以て俄に御明察を成下度奉存り變夷猥優
近海り儀もいへ〻ち不恐　御親征御雷發之變もり得ち當時微弱之底く沈く罷在り得共
譜代相伝之兵衆老幼を盡し先登仕奉保護　竊に醜掃除醜夷奉安　宸襟度次心罷在
り其節懶弱之羸兵り得共惜命相憶り者多そりち祖先を遺訓り座り右次心之儀上京否疾く
建白可仕儀り得共不幸〻して偃武早く狼戻之家子く故家夫之食邑く比退僅く三十万
石を領り其後世嗣多く秩半減く相成三軍く兵士不能糊口傍農業相営く辛〻て
二百年之星霜相凌り得共泰平ち諸侯体く形容とて俄一切不存り得ち唯々　朝廷
之御親兵ち俄ち父親之庭訓く薫習罷在り得共上京之許多く主従一同切蕃
遥拝ち已打過り殫忠大弼俄三ヶ年く間滞府仕昨冬十月飯國り否上京之　公命相降り
ち主従一同如飯父母心地く相成不堪寧所國改れ不関三軍勇立先を争い歳

改ろりを待兼各兵具を提け當正月元日深雪を踏分出之上京仕り〻ち祖先之舊忠了曜〻奉蒙御殊恩難ち一応く勇条ち以ち出陣同様く愚
拳仕り北羽山間に生立り田舎之将士殊く減秩後窮楚之小身く得ち輕拳暴動
条く移慎戒為致奉尊奉　禁闕深く奉恐入り候唯々舊典を不相欠様ち慎居り
ちおのづから因循之咎は眺可奉蒙哉今更以奉恐入り斯り親覆上京ち仰下り上ち
素ち守衛之俄ち勿論何時何様ち急變く羽檄飛来り三軍不奏昼夜輕身ち
馳登り覚悟ち先達ち暇下り兵器惜く預置り寸裏り憚察ち成下り〻く難有
仕合ち存じ候去四ヶ年く向東西く朝旨仕り得ち國政路漏ち難量〻へち弾正大弼俄ち
飯邑仕國方相委ひ他日之用ち準和勤り様ち〻く右ち都ち朝臣之常体〻り〻へち奉言上り
ち奉恐入り後故相罷在り共不存寄勤王忠誠之心得方蒙　尊慮之至奉言上り段深
奉恥入り誠恐誠惶頓首

○先般上杉弾正大弼家来宮林作兵衛小幡源吾参殿仕節の親戚の諭解を成下され意具に申出誠以冬匂侍の儀難有奉感戴候弾正大弼も領分十分一も不相充暮余を僻邑國力凝弱（微カ）の筈に得共平日主従艱苦を芝く軍備に心肝を砕き候得共十分難行届慨歎に不堪罷在候処に相立て候儀に候間敷哉に候得共当今格別之御変故も難計の時節に候得共万一の親魂実掃攘の仰出に付ては朝廷之御為朝廷の由緒之家筋にも座候ては征電掃之の沙汰に相至候間数年の座候（従カ）後来の変興御左右を御備又は御先手（殺カ）をも為命候儀其節は羽檄奉唯累世譜代之兵卒を引具一速に馳参可申家祖之武名不堕様兼々相心得罷在粉骨砕身尽忠奉報皇恩李朝之御威徳を奉暉候より固より臣子分内之事に候得共改る申上候儀も冬之浮処今般栄の諭解に候不顧多罪歎哀申上候間何卒御聞置被成下度奉願上候誠惶謹言

上杉弾正大弼家来
竹俣美作
薩戸九郎兵衛

別紙申上候弾正大弼より御趣意申聞候に付弾正大弼より直に可申上筈に候得共一通之得共深度因人逐電に従一同不堪恐縮存候に付探索中に候得共今に逃失を務歎仕候に付心中別て恥入候間陪臣より内々申上候様にと存候て誠惶謹言

上杉弾正大弼家来
竹俣美作
薩戸九郎兵衛

七月

本書江戸浦上家用人堀口傳兵衛所蔵云

○御日付土屋民部建言　癸亥八月　○三十石文久二ヨリ

方今之形勢追々切迫内外共ニ不容易ニ付柄日夜苦心仕居候就ては近来
諸改務種々ニ改革まて旧弊をも一洗日新簡易ニは所置有之候ゟ人情
益軽薄粗暴ニ相成規則法律を迂遠ニ嗚寃改大度不可測ニ御徳恩
を困循姑息ニ存天下ニ御大改を自己ニ一慮まて抑揚波瀾古法旧章
不可欠ニ御鴻式を虚礼徒法ニ蔑視し自侭ニ取捨致し万戦心勝
ニ妙等奇計ニ見掃(掃)候ニ付三港拒絶外夷掃攘ニ説を唱候ニ付軍ニ不
少奉存攘夷拒絶ニ時勢不可為ニて且難成は大議ニ有之仮令鎖
談成功ニ見掃有ニて取捌り度候中上ニ共容易ニは委任も先ニ心許ま
存候ニ付候人ニ性来天賦ニ英雄有ニ豪傑肩有ニ必偉ニ之迎有ニ人
建議ニ付ニ格別非常ニ御英断まて委任ニ遊ばるゝ可然欤とま

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

存い迚も成不ㇾ申候ハヽ、兼大ニ掛念仕い若鎖談ハ取捨ㇾ内実無
争論閙いハヽ、論者一人ニ難事ニ立ㇾ普天ニ民土炭ニ苦ニ申上い迚も
等ニ其時勢不可為ニ根據ヲ審ニせ百事過激ニ至ㇾ治乱関轄ニ
基ㇾ着眼等ニ唯目前、恥い事のミ有ニ痛歎ニ玉、ニ一切鎖港
ニ而談判ニも相成いハヽ、莫大ニ償金ヲ貪ㇾ旅館高館
女外諸費女上翌唱ニい
為せ忽兵端閙ニ立必勢ニ至い彼ニ
ㇾ等ハ見合御征伐ニ勿論ニ事ニいたれ女動揺、乗ニハ國内不軌ヲ謀い
者等ニ左ハ難ニさせ内患外寇一時ニ生ニ所謂御府内如鴨湧如
麻乱容易ニ御平治難ニ遑ハ場合ニ可相成ニ生霊悲難ニ若如何ニ
ヲ為ん炸迚ニ御大義ヲ三奉行大小監察計のミ談判相成女内ニ
紛ニ一定不致内ハ施行とヲ名ニ
善悪ヲ云ハヽ攘夷拒絶ハ施行ニ了 御廟等ニ相成いハヽ、一先諸大名ヲ
勿論旗下ニ臣ニ得ニ御相談ニ上人心向背ハ親察ニ上ハ勝敗ニハ論ヲ先暫置
方今ニ形勢ニ前代未曽有ニハ大事ハ施行ニ成否衆議ニ
座難沢いハヽ一ト先引退キ何日限封書ヲ持ハ称ニ 仰付相人廣
攘夷期限有ニ上ニ難ニ行儀ヲ欲又速ニハ奪發攘夷ニ成い方
全ニ良策ヲ上い次又迫ニ武備ハ更張ハ振起ニ上人心一致ハ見込ハ施
行ニ欲又成丈ケハ國内ハ鎮靜迫ニ時日ハ心ニ一ニ方遠大ニハ良策ヲ欲何
ニも右ニ及ニ上ハ御前ハ家門ハ譜代ニ大名成名ニ
大論ニ 仰付群議 御聖評告沢ニ相成今日 御廟算ニ一定ヲ
以ニ吾等ニ基ヲ相建ニさいる内ニ人心ヲ折合ヲ何ニ迫ニも分ニ了御
基本相建ハ上ニ数百年ニ昔ヨリ今日ニ至迄赫々明々御天徳四表ニ

為輝い祈柄まつる　御威徳御更張萬民　御鴻徳に奉依頼赤子
い如慕父母を存ら若不軌不庶（庶カ）ら諸侯有ら
此御拒絶ら兵撓ら遊い、諸侯ら改革後粗割拠ら勢ら未成後ら
自侍ら所業有ら我国ら世習四ら五裂不軌不法難制摸稜ら可至ら痛
苦仕ら況ら長薩二藩不待　公命ら謀ら所業有ら遵奉
敵慮ら姿ら、い得ら古語ら有ら将ら軍ら軍中ら二ついれば　天ら命
をも不用ら小世人ら、ら〻幻ら言ら小児ら如ら此ら
を仕せい為ら大ら事ら為ら悪　神祖権現
不庭ら徒を御前年ら為遠ら、ら〻雨年ら
上も　公命を不待ら謀ら不軍政いを詰ら弾令ら不用ら
ら譯ら為ら捨置難ら遊候ら事ら後追ら援寡ら小手徒ら
以ら外ら為ら　皇国ら千万載ら下ら至近征夷撰夷ら念ら不一ら忘事ら
ら小得ら多謀ら今ら今ら所置を必御先
頃ら格別ら鄭重ら厚礼ら一旦ら通信ら仕下い警寡共ら後
故唯ら信義ら忘却ら不義理ら事ら遠ら小所置ら一ら
不礼不法ら所業相願ら厳ら譴責ら上速ら小奮發共ら獨孤拒後
掃除厳拠ら処ら有ら故ら唯今ら御廟等御次ら武威
飽迄御更張肝心一途ら出ら外仕度方今ら形勢ら諸藩共両説二心
を抱ら心配ら始終不庶両御用向仕若道路輸送ら輸漕并警衛人
数ら如何ら大禄といへとも追ら疲弊実地ら尽力難行萬事今備ら
策ら心許ら為ら世形勢ら俗ら了蛇ら有ら守群ら有ら閉鎖
ら拠ら仕ら施行ら世ら来ら為ら速ら皇威ら更張ら為　五十ら

幕府ニ威光御輝　日本國風ニ事物トシテ遠者ヲ重ンシ近者ヲ卑ムノ弊アリ
為ニ動モスレハ西洋ニ十分ノ利アリ　皇國ニ五分ノ物アルモノヲ物足ラ
ヌヤウニ思ヒ候ヲ嫌ヒ　幕府ニ威令御示シ相成ハヽ必然法律ト相立チ乱民モ
鎮静ニ　京師ノ如キ都会ト雖モ自然ト靜ニ
公武ヲ問ハス御親睦ニ　天下ノ為ニ　葛乗ヲ営惑
一奉リハヨリ　公武ノ隔絶ニ至リ候事ハ従
御維新ノ英公明正大ニ申譯ナク
御家柄ヲ恐天下後世ニ嗤笑ヲ免ルヽ様祈天ノ外ナク　京師ニ
御發明ノ事ヲ一ノヘニ若干上　御暴勅ノ降ラサルヽ事ヲ受ケ遊ハ
ヽ後世ニ　祖考ヲ汚ス不孝ヲ恐ルヽノミニテ
異(ホノ)改ノ変動誠ニ驚愕ニ至リ候ニ付　官吏轉遷夕ニ嘗シ朝ニ討シ奉仕
ニ臣日ニ恐ニ至リ元来見ヘ中ノ臣下ヲ玩物同様ニ取扱ヒ候ニ付恐君上ヲ木
偶人ニ世上奉称ノ近日ヲ薄士ヲ冷笑指目致シ居リ候ニ付承辺殊懐難忍
ヲ堂ヲ小事ヲ称シ万機政ヲ御不徳ニ相成ノ譏
代恩顧ニ旗下ニ臣ニ至ル迄各悲実ニ之談茶話抔ニモ政務ヲ訕
ヲ悪奨倍臣ニ至ル天下ノ政務ヲ誹謗致シ終ニ好吏奸黨抔ヲ蔑視
致シ一種ノ悪計相構ヒ基本不立ヨリ種々ノ不都合醸生ノ
事大息痛歎ニ至ニ付ニ妄説ヲ以テ程承知不仕ノ儀ニ付ノ
ヲカシノ御時節ニ到リ黙シ阿順致シ候モ恐怖ニモ有之ニ付
仰ノ條々ヲ上ヲ諮詢ニ付ヲ程ヲ具ニ申上奉希候　恐惶謹言

土屋民部

六八月

土屋氏ノ建言一ヲ那辺ニ在ヲヤヲ知ラス

當時之人物最以て忠直正義之言と謂ふべし

壬戌十二月　公儀より攘夷
勅書御布告諸侯方策畧　御尋ニ付申上草稿
仰立之　御考合之相成候格見込

今般　公義より攘夷
勅書之通被　仰出候ニ付而ハ銘々之策畧ニ而ハ
思召ニ不見込旨細ニ御認来二月　御上洛迄ニ
仰出候ニ付　勅書御字共御用意矢張
御見込ニ　仰立下　御考合之上御策畧見込ニ次第早速ニ上坂
了達之筈ニ候ニ付右　御尋の策畧ニ而ハ私義ニ存寄之儘ニ及候ニ付右之筈ニ
候間惟私義の儘ニ及候ニ付右之筈ニ候間　御家の　李主の体様

楠公等と雖も命筆悉ちゃ多変惟た孔明孫子
大公望と雖も力と及び難きこと惟孔明孫子大公望のごとき者孔子曰
と雖も恐らく筆舌の生ずる所有る者多変なきものいふと曰ふ子曰子亦何
王、詰けれどもふ国より大く敵すべからざる
弱小国より強不敵すべからざる海内の地の方千里なるもの九にして亦何国集
めてその一をなすに足る一を以て八を服せんとするは雖の小国にして楚の大国
を押領せもとするに異ること蓋亦その本と及れとすること今此天地の周囲及
獨乙の里法を以て量るに其面積九百二十七万八千九百六十
方里有り而して人類の住居する陸地は廿四分の
一にて猶六百分の五世界の総体数を以て
積るに二百三十七万九千百五十方里と惟ふ和定めて事実ならざる
本邦

の面積独て里法を以て量るに亦幸多方里を減ぜざる左ればこの五世界弐百分の一
にも過ぎず外国に比べ本邦は盡く嶮腹の土と見做
一にても百分の一に過ぎん孤天の外国と比較していその大小の懸隔懸絶
のごとくなるとき其上外国の学術技巧
の地動奈
頃り重力 日々月々に長進天文地理船艦銃砲城廓の制等一として廿の妙
にあらざるはなきに旦蒸気機の学盛に和蘭に始まり海に蒸気船成りて
陸に蒸気車を行るに近頃当年より五年前独乙の開校を設け
新地図を得て校生徒に普西亜俾斯麻宰相
幾学論生沙項尼亜羅馬連虞耳曼勃爾納公翁利亜薛亦節蘭土和蘭
白耳義弥利堅諸国に内皆盡く山を截り谷を填め蒸気車を行るべき鉄
道数幾條となく設開拓殖るもの数十を長きもの八千里を降らず
本邦の里

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

法を以て量
る、所より 艾国力の強大富有果して
この度の挙ある所 本邦よりては 大朝をはじめ御船改の御改革等より来たる
備へられ列藩よりも国勢の多二三艘 彼れよりも劣らざる外
国に比較しては未だ不行届勝にて有之候得共 天下の城皆古制
にて御座候て當今軍術の法に叶ひ候えば 各国共 戦争の為に築きたるもの故 外
敵防禦の為には 行届候様 御台場を次第に且三都をはじめ外郭の設と
て も多くは警へりなば 全く裸體空手の姿にて 其上当年まで彼れを
知るの義を務めざれば よりて 御駕艦のはなはだ失策へ
兵務の不届そは江府第一の要害の地にて 永く外国人に 備等
の度如此の挙ては 和蘭の一小国とは 抗拒等 いたし 悠甚多変事を
存 和蘭とても誰も小国と軽視いたし候にても多くは来る、其実を究めざる
内本国は三十餘年前 白耳義の如く 狭小なる地にて
観へ尚印度諸利収等 擲る高大の領地有之 日南諸島は大抵千所有之
日南諸島もそれ 本邦より度大にて 戸数 拾万戸位 有之
遥に多くへ 戸数 拾万戸位 有之 本邦より
軍の用意は行届 敵に備へ 海貿易の利益等 艾国力を盛し 艦
又多年来を存 然るに 一国の抗拒とは当今の安にては 実
以ての外 外四大国を備えての抗拒の如きは 人業いつまで
以ても可申哉 遂に其本 支へ 兼ねる 抗拒 実に天運の然らしむる所
次第 開け各国の勢力一所作出来 鎖国の如き 実に天運の然らしむる所
皇国独り此天運を奈何ともする能はざるを自 御鎖国の
御国力とは技術を以て 不可なる叶 又学術技巧と互に切磋して相長しも
の故 たとい此節 御鎖国の旨計 異国より来る術 始終 鎖国にては 国

カも 御依佗もやて外国と為ん事も終ニ ほ
一ツ曳 本邦當今の形勢ニ則致ス事にて 明ら
サーく 御志をこそ 降 本邦を世界の大中国の
と ほ称呼ス事 忍ニて外国を得て夷狄
共多ハ天下国ぶの内なる大邦のみ心得て 益もなき事と
て辺陲の外邦をさへ 卑て此の歴史 本邦の
地形の如く早く開け化ニ和王智の王者出てゝ賢才の臣下多く
礼楽政刑 制度文物形の如く 餘ゝ故ニ倫理経常も
禽獣夷狄の如くなる事ハ 故ニ我狄とも蛮貊とも呼ゝ
本邦の如き 経常ニ君ニ国をも妻と称ニ 漢人既ニ誤ル
ゑゝ有力の国をも我狄夷狄と 唯種呼をこそ
本邦まて其誤ニ倣ひ 頑外邦他国我賤ニ学術技巧 制度文章 年代
ゑゝ有力の国をも我狄夷狄と 唯種呼をこそ 征夷
本邦ニて夷と称ニてハ蝦夷ニ限りゝ 後日本紀ニ其 譲ら
ゐ称歸も本蝦夷ニ出てゝ 後蝦夷の外ハ 本邦まて
多とも往古任那高麗百済 新羅も夷とゐ称ゝ 後ニ
多とも往古任那高麗百済 新羅も夷とゐ称ゝ 後ニ
朝鮮琉球等の小国を夷狄と ゐ種
ほ践称ゐ 但ゐ 後れの方ゝ 洛ち

、出て兵卒の錬熟も諸藩の上に出て城制の堅固なる諸藩の上に出て候ら
為ニて兼ねて禍乱之禍心を改包蔵し國ニ叛き自ら王畏服又　御徳化
をも慕ひ止ることを貢献を修めて奉臣従ひ類して是其本ニ基くの説て
学ぶ尚書も力を用ひて徳を尊ぶ徳を用ひて義を量るとし見え
古周禹兵法も物を見て興る侍るとするを両文ともに有て其国力枝
能敵国と侔しきにかゝはらず兵を擯へとて其義いふ招彼に超過て
とし其志を得ざるに於て難出来是乃ち天下の心理実理明理公理と称ひ
くハ此道理をいふく　御見之ニ　仰上　天朝　大朝の兵ニ其本ら多文此も過の
ら節ら毫の過興を不ら存於ら是ら実ニ忠義ら全ら士ら節ら落ら
寺申上ゟ以上

十月廿四日

佐久間修理

越知通桓小傳

越知通桓字士威小字顯三郎春雲生下毛吉田村人
其先出於伊豫河野氏祖曰守弘有氣節業醫名聲殊
著父曰意伯亦繼祖業通桓性豪儻少有大志雖事繼
述而意實不屑之遂專精經史尤喜忠憤義烈之舉以
仁人志士所難處之事為己任焉文久二年壬戌正月
十五日改名三島三郎以節死于都下年二十有五以
事犯國憲官吏將籍沒其家居數月遇赦免之通桓平
居謂母曰人之富貴利達觀之百年之後真蜉蝣之榮
枯而已唯挽回倒瀾維持名教垂馨名於竹帛是大丈

夫之志也歟當其圖義舉之時絶不見感憤激烈之色
如詩酒自耽者雖家人父子不知其所期此亦志士處
變之道也夫嗚呼是亦足以見其平生之有所守矣通
桓已死節或以實告其母母嘆曰吾聞衝堅挫銳身斃
志已者義士之事也我兒亦有似義士之所為乎毫無
悲泣憐惜之色可謂有是母而有是子矣通桓為人長
身而秀貌眉目高潔容姿閑雅恰如書生然當其臨事
忠憤激昂能奮為人難處之舉遂以此終身其亦可謂
之偉丈夫者歟

青淵澁澤榮一撰

書春雲樓遺稿後

幸酉之秋余遊常野二州之間遂入武都多接
奇士於稠人之中近頃通桓而益奇之其冬臘
月再會武都互相抃喜酒酣以往談及當世之
得失與
皇路之多難通桓英氣磅礴悲憤不自堪夸
拳橫眉間策以為其人倘沈果胷間磊磈
而大義分明以節烈先人能進而成功名者
矣遂一唉相別既而終十餘通桓以壽節死

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　ガラス使用

而于時天下奇傑之士多涉忌諱余於通桓
罪交結至二而未暇收碧血甚沒余遠趍関西
入 神京歷遊山陽諸州明年妻婦郷則
故友若之如晨星於是興遺友川連生訪通桓
之窩居於絹水之西涯則祖父守弘者已逝而
垂白老母獨存諸遺物散落幾盡一卷
之稿顧念昔日蓬戸都動酒鮮賸携美人易軟
燭大聲悲歌悅牲猶昨而今乃叩蓽扉對草
庭憐於梅寒以讀於今感有不堪感泣血淚焉

遂悵之以歸示友人澁澤生讀之大悲通桓
之志憐余情義之切以剞劂氏余每語
忠憤義烈之事而及通桓獨惜其才之一
死未盡焉雖壯狂瀾之倒此得英雄之士奮然
起於草莽之中輕一死果決為之者則何能
挽回之哉今乃以區區詩卷欲傳之于世固非
通桓之志唯其敵天地之正氣鳴神聖之公
道存
皇基於萬安是通桓之所以一死報國也壯則

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3　　ガラス使用

後進之士由之以有所憤起此固通桓之志也
夫嗚呼人之稱知已豈偶然乎吾之知通桓
通桓之知吾嗚呼興通桓吉之歟遂揮涙
書其後

于時文久三年癸亥秋七月

武蔵　東寧尾高弘忠徳

836
209
3

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用